

跡遺問堂

主要地方道三重弥生線(因尾工区)道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第101輯

1998

大分県教育委員会

ど う の ま
堂 ノ 間 遺 跡

主要地方道三重弥生線（因尾工区）道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第101輯

序

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて、平成8年11月から平成9年2月に実施した主要地方道三重弥生線（因尾工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

堂ノ間遺跡の所在する本匠村は、九州山地に抱かれた自然豊かな地域であり、山懷をみると国指定天然記念物の小半鍾乳洞を代表とする石灰岩の岩肌が随所に露出し、厳麗な景観を創りだしています。特に昭和37年に発見された聖岳洞穴の化石人骨は、この大自然の奇跡によって生み出されたもので日本列島の人類史を語るうえで欠くことのできない存在となっています。このほか、村内各所には中近世の石造物も数多く残されており、当時の面影を漂わせています。

今回の調査により遺跡は、縄文時代から古墳時代にいたるものと確認されましたが、この発見は当地域の知られざる歴史を解明するうえで重要な資料をもたらしました。今後、本書が文化財の保護・啓発並びに学術研究に役立てば幸いに存じます。

最後に、この発掘調査に多大なる御協力を頂いた関係各位に対して、衷心より感謝を申し上げます。

平成10年11月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は平成8年11月から平成9年2月にかけて実施した主要地方道三重弥生線（因尾工区）道路改良事業に伴う大分県南海部郡本匠村大字堂ノ間所在の堂ノ間遺跡に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は、大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 遺物の洗浄・復元は大分県教育庁文化課文化財資料室調査補佐員の田北節子、今村信子、長野とよみ、今別府洋が行なった。遺物の実測・トレースは牧尾義則（同文化課副主幹）、染矢和徳（同文化課主任）、佐藤美佐（同文化課嘱託）、西嶋スミエ（同資料室調査補佐員）があたり、遺構の実測は染矢、トレースは長野が行なった。写真は友岡信彦（同文化課主査）、染矢が撮影した。さらに、県文化課資料室の多くの方々の協力を得た。
4. 発掘調査にあたっては発掘調査補佐員の柳井利治、稗田牧夫、柳井フサエ、稗田アヤコ、柳井スミコ、柳井ヨシエ、稗田マサ子、吉良マツエ、柳井ハナコ、柳井日吉、岡野文江、柳井ヤエコ、今山フジエ、柳井雪江、河原ナツエ、稗田セツエに多大なる御助力を得た。
5. 出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
6. 第3図、第4図に使用した座標系は、昭和43年、建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。表示してある座標値はキロメートル単位である。
7. 題字は伊東恵実（同文化課嘱託）による。
8. 本書の編集・執筆は染矢が行なった。

本 文 目 次

I. 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の経過	1
II. 地理的歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査の成果	7
1. 基本層序と遺構・遺物	7
2. 遺構と遺物	7
IV. まとめ	28

插图目次

第 1 図	堂ノ間遺跡位置図	2
第 2 図	堂ノ間遺跡周辺遺跡分布図	3
第 3 図	堂ノ間遺跡周辺地形図	4
第 4 図	堂ノ間遺跡遺構配置図及び土層図	5～6
第 5 図	1号竪穴住居跡実測図	7
第 6 図	2号竪穴住居跡実測図	8
第 7 図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図	9
第 8 図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)	9
第 9 図	2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)	10
第 10 図	3号竪穴住居跡実測図	11
第 11 図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図	11
第 12 図	4号竪穴住居跡実測図	12
第 13 図	5号竪穴住居跡実測図	13
第 14 図	7号竪穴住居跡実測図	13
第 15 図	6号竪穴住居跡実測図	14
第 16 図	8号竪穴住居跡実測図	15
第 17 図	8号竪穴住居跡出土遺物実測図	15
第 18 図	9号竪穴住居跡実測図	16
第 19 図	9号竪穴住居跡出土遺物実測図	16
第 20 図	10号竪穴住居跡実測図	17
第 21 図	10号竪穴住居跡出土遺物実測図	17
第 22 図	11号竪穴住居跡実測図	17
第 23 図	12号竪穴住居跡実測図	18
第 24 図	12号竪穴住居跡出土遺物実測図	19
第 25 図	13号竪穴住居跡出土遺物実測図	19
第 26 図	13号竪穴住居跡実測図	20
第 27 図	14号竪穴住居跡実測図	21
第 28 図	14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)	21
第 29 図	14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)	22
第 30 図	14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)	23
第 31 図	14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (4)	24
第 32 図	1号土坑実測図	25
第 33 図	2号土坑実測図	25
第 34 図	3号土坑実測図	25
第 35 図	1号溝状遺構実測図	26
第 36 図	2号溝状遺構実測図	26
第 37 図	表面採集遺物実測図 (1)	26
第 38 図	表面採集遺物実測図 (2)	27

表 目 次

第1表	14号竪穴住居跡出土石器観察表	22
第2表	表面採集遺物観察表	26

図 版 目 次

図版1	堂ノ間遺跡遠景（南から） 堂ノ間遺跡遠景（北から）	図版11	1号竪穴住居跡出土遺物 1号竪穴住居跡出土遺物 1号竪穴住居跡出土遺物
図版2	堂ノ間遺跡北側近景（南から） 堂ノ間遺跡北側近景（西から）	図版12	1号竪穴住居跡出土遺物 2号竪穴住居跡出土遺物 2号竪穴住居跡出土遺物
図版3	堂ノ間遺跡南側近景（南から） 堂ノ間遺跡南側近景（西から）	図版13	2号竪穴住居跡出土遺物 2号竪穴住居跡出土遺物 2号竪穴住居跡出土遺物
図版4	調査風景 1号竪穴住居跡 1号竪穴住居跡遺物出土状況	図版14	4号竪穴住居跡出土遺物 8号竪穴住居跡出土遺物 9号竪穴住居跡出土遺物
図版5	2号竪穴住居跡 2号竪穴住居跡遺物出土状況 3号竪穴住居跡	図版15	9号竪穴住居跡出土遺物 9号竪穴住居跡出土遺物 10号竪穴住居跡出土遺物
図版6	4号～6号竪穴住居跡 5号竪穴住居跡 6号竪穴住居跡	図版16	10号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物
図版7	7号竪穴住居跡 8号竪穴住居跡 9号～11号竪穴住居跡・3号土坑	図版17	12号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物 12号竪穴住居跡出土遺物
図版8	9号竪穴住居跡 10号竪穴住居跡 11号竪穴住居跡	図版18	13号竪穴住居跡出土遺物 13号竪穴住居跡出土遺物 14号竪穴住居跡出土遺物
図版9	12号竪穴住居跡 12号竪穴住居跡遺物出土状況 13号竪穴住居跡	図版19	14号竪穴住居跡出土遺物
図版10	14号竪穴住居跡 1号土坑 2号土坑	図版20	表面採集遺物

I. 調査の概要

1. 調査に至る経過

大分県土木建築部では、平成5年6月に主要地方道三重弥生線（因尾工区）について、道路改良事業の実施を決定した。平成7年12月15日に土木建築部より路線内に所在する堂ノ間遺跡の取り扱いについてはじめての協議がもたれた。この結果、平成8年3月11日より遺跡確認を目的に試掘調査をおこない、弥生時代後期の遺構・遺物を確認したため本調査の実施を決定した。

2. 調査の組織

平成8年度

調査委員 後藤 一郎（大分県教育庁文化課長）

調査主任 渋谷 忠章（同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

調査員 染矢 和徳（同文化課主事）

調査事務 山崎 靖信（同文化課課長補佐兼管理係長）

小野 高寛（同文化課主事）

3. 調査の経過

平成8年11月11日より本調査を開始した。調査区は大分県南海部郡本匠村大字堂ノ間字松木園・田久保・半ノ切・一ノ口に広がるもので、調査対象面積は1100㎡である。調査は重機を用い表土を除去した後に、道路幅杭を基準に10m×8mのグリッドを設定し、発掘調査作業員の手作業により遺構・遺物の確認作業を行なった。精査の結果、竪穴住居跡14基、溝状遺構2条、土坑3基を確認した。遺跡は村道及び工事用仮設道路直下にあったため、部分的に深い攪乱を受けていた。遺構・遺物の調査は土層ベルトを残しつつ掘り下げ、遺物の取り上げ（実測図・写真撮影後）が終了した後、土層図、遺構平面図、遺構の写真撮影、空中撮影を実施した。調査は平成9年2月10日に終了した。

II. 地理的歴史的環境

1. 地理的環境

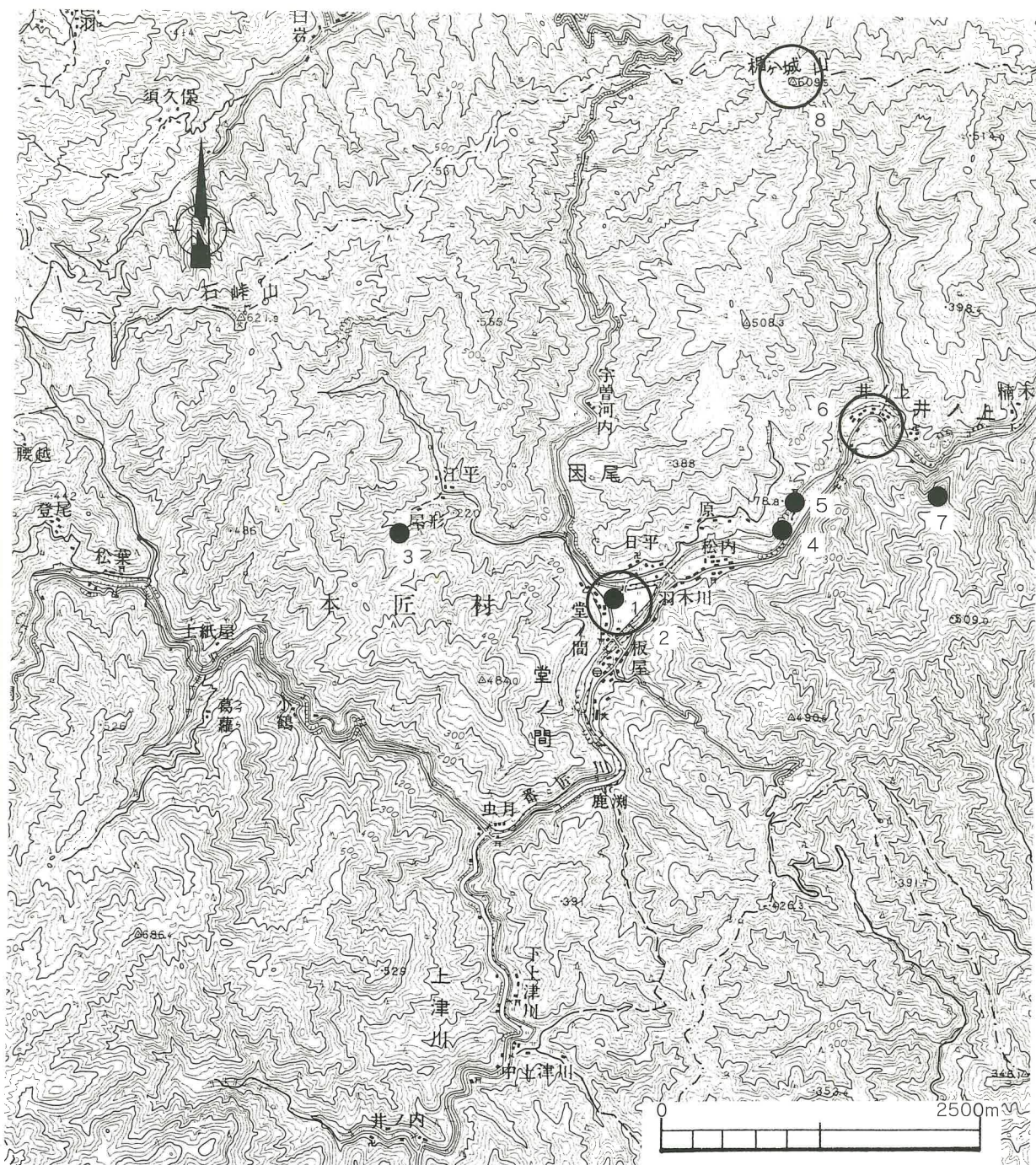
堂ノ間遺跡の所在する本匠村は、大分県の南部に位置するもので、北と西を野津町、三重町、南を直川村、宇目町、東を弥生町に囲まれている。海岸線からは約10～25kmの内陸に位置するもので、九州山地の一部を構成している。この地勢が当地域独特の気象を生み出しており、気候的には瀬戸内型が南海型や九州山地型に移行する遷移域にあたりとされている。村の94.4%は山林で、番匠川が小川川、久留須川等の支流を集めながら、村中央部を西から東に貫流し、豊後水道へと注いでいる。これらの流れに沿って狭小な河岸段丘や平坦地が点在し、そこに現代の集落が形成されている。周囲の急峻な山々は標高600mから700mで、砂岩、石灰岩、頁岩、チャート、粘板岩を基盤とするもので、洞窟や鍾乳洞が散見できる。遺跡は村の中央部にあり、番匠川と小又川が形成した、河成堆積地と河岸段丘上に立地している。調査区表土除去前の標高は83mから86mほどで、河川から近いところで70m、遠いところで200mほどしか離れていない。発掘調査中にも調査区内からは砂礫層を確認しており、河川の氾濫が頻繁に起きていた事を裏付けている。

2. 歴史的環境

本地域で特筆すべきは、昭和37年本匠村大字宇津々の聖岳洞穴から発見された化石人骨である。人骨片の他に石核及び石刃が出土しており、人類学的には新人、考古学的には更新世上部に位置付けられた。この成果は、東アジアにおける新人の拡散状況を分析する上で極めて重要な成果をあげた。縄文時代から古墳時代にかけては、近年に至るまで前高洞穴に代表される様に、断片的な遺物の出土はあるものの、発掘調査等による遺跡の報告はなされていなかった。平成7年（農村総合整備事業本匠地区に伴う堂ノ間遺跡発掘調査）に今回報告する調査区の隣接部より弥生時代中期の円形竪穴住居跡や弥生時代後期の遺物等を確認しており、次第にその諸相の一端が明らかになりつつある。律令制下においては海部郡穂門郷に、11世紀代には佐伯荘にそれぞれ属していると推定さ

後藤一重編 『堂ノ間遺跡』 本匠村教育委員会 1997





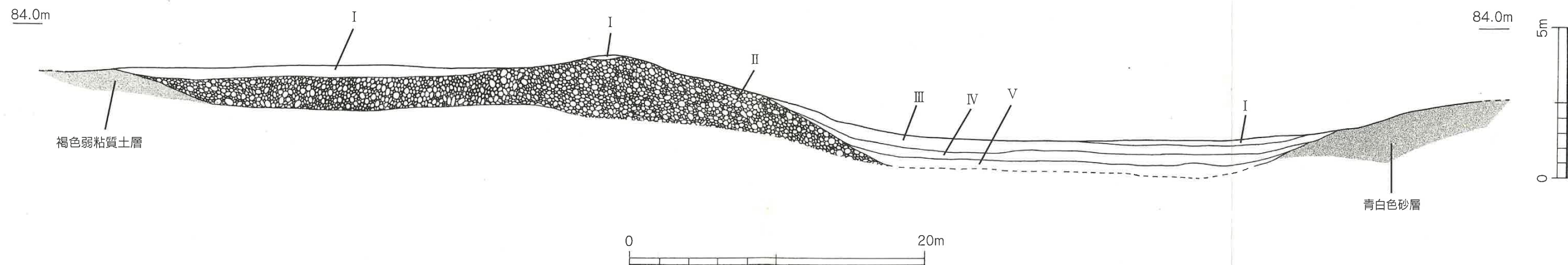
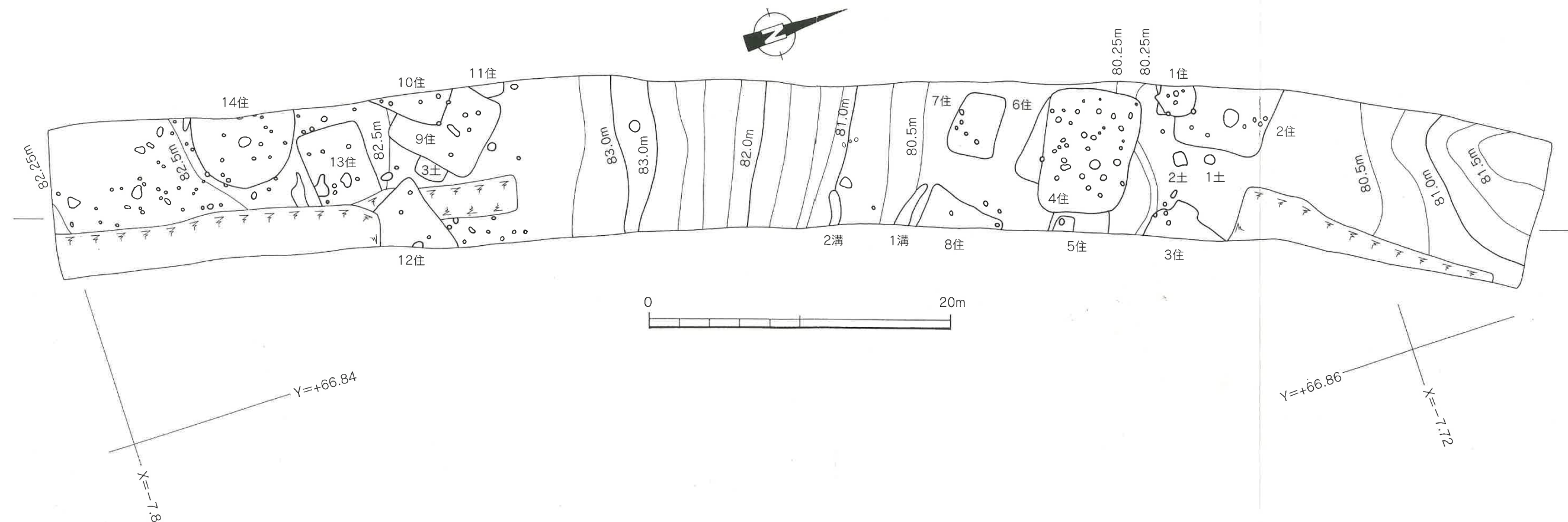
第2図 堂ノ間遺跡周辺遺跡分布図

(国土地理院「三重」5万分の1地形図より転載)

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1. 堂ノ間遺跡 (縄文・弥生・古墳・中世・近世) | 5. 前高洞穴 (縄文) |
| 2. 三竈江古戦場跡 (中世) | 6. 井ノ上遺跡 (縄文) |
| 3. 柳井館遺跡 (中世) | 7. 因尾砦跡 (中世) |
| 4. 中屋敷遺跡 (縄文) | 8. 楯ヶ城跡 (中世) |



第3図 堂ノ間遺跡周辺地形図



第Ⅰ層：橙色土層（アカホヤと考えられるテフラ）で厚さ約20～40cm。遺構検出面で部分的に拳大の礫を大量に含む。
 第Ⅱ層：固く締まった砂礫層（級化層理）である。層上面では第Ⅰ層との漸位層が僅かに観察される。
 第Ⅲ層：明黄色土層（アカホヤと考えられるテフラ）で厚さ20～50cm。遺構検出面である。
 第Ⅳ層：黄色土層（アカホヤと考えられるテフラ）で厚さ20～50cmである。
 第Ⅴ層：淡黄色土層（アカホヤと考えられるテフラ）で厚さ50cm以上である。
 *土層図の垂直軸（標高）は、水平軸に対して2倍に強調している。

第4図 堂ノ間遺跡遺構配置図及び土層図

Ⅲ. 調査の成果

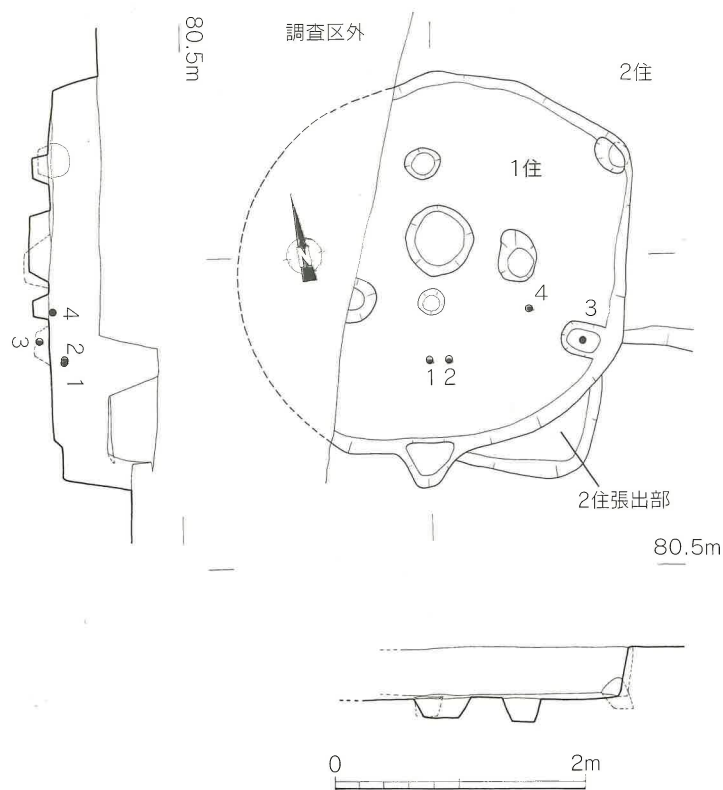
1. 基本層序と遺構・遺物

調査区は小又川の川岸（堂の間橋付近）から、堂ノ間の集落南側（三竈江神社）に向かい設定した。調査区の幅は約11m、全長約100mである。当該区に付設してある村道及び工事用仮設道路を除去すると、直ちに遺構検出面となる。検出面の標高は80.25mから83.0mである。区内の土砂堆積状況（第4図参照）は複雑で南側では盛土層（現代の客土で厚さ約1.5～3m）－橙色土層（第Ⅰ層）－砂礫層（第Ⅱ層）の順であるが、北側では盛土層－第Ⅰ層－明黄色土層（第Ⅲ層）－黄色土層（第Ⅳ層）－淡黄色土層（第Ⅴ層）である。遺構は第Ⅰ層及び第Ⅲ層上面から確認されるもので、深い掘り方は第Ⅴ層まで達している。調査区両端には褐色弱粘質土層と青白色砂層（級化層理）が広がるが遺構・遺物は確認されていない。遺構の広がりを見ると、調査区北側の1号～8号竪穴住居跡、1号・2号土坑、1号・2号溝状遺構のグループ（第Ⅰ層及び第Ⅲ層より掘り込み）と南側の9号～14号竪穴住居跡、3号土坑のグループ（第Ⅰ層より掘り込み、遺構底面が第Ⅱ層直上である）に分けられる。両グループ間に広がる無遺構範囲は上記第Ⅱ層の広がる部分で、遺構の掘削に不適当（9号住居と一部のピットは第Ⅱ層を掘削している）であったと考えられる。遺物は遺構に伴うものが大部分であるが、周辺の水田からは土器片、打製石斧、石鏃が表採できる。以上の結果から、まず、岩盤上（現河床に露頭する砂岩及び粘板岩の基盤層）に褐色弱粘質土層や第Ⅱ層あるいは青白色砂層が堆積（河川により砂礫土が堆積し谷部を形成していたと推定できる）したと考えられる。続いて第Ⅴ層、第Ⅳ層、第Ⅲ層、第Ⅰ層が降下堆積、平坦部を形成し、掘削が容易な部分に遺構が展開していったことが伺える。

2. 遺構と遺物

1号竪穴住居跡

遺構は調査区の北端、2号竪穴住居跡南壁張出部直下より確認されており、住居上面は2号住居により大部分が削平されていた。遺構埋土の観察からも1号住居から2号住居への切り合い関係を確認した。遺構の立ち上がりは明瞭で、西側は調査区外に展開するものと考えられる。平面プランは歪な楕円形と推定され、南壁には平面形状台形の張出部を持つ。確認できる住居の規模は東西2.12m、南北3.28m（張出部を含む）、最大深85cm、張出部は上辺18cm、下辺53cm、奥行35cm、最大深54cmで、住居床面より7cm程高い。住居中央部には直径55cm、最大深17cmの土坑（炭化物、焼土は確認できない）がある他、4本の柱穴を確認した。規模は最大で長軸37cm、短軸32cm、最大深22cm、最小で直径20cm、最大深12cmである。南東隅にも掘り方を確認しており遺物を出土している。規模は長軸32cm、短軸27cm、最大深14cmである。北東隅の柱穴は2号住居の主柱穴である。



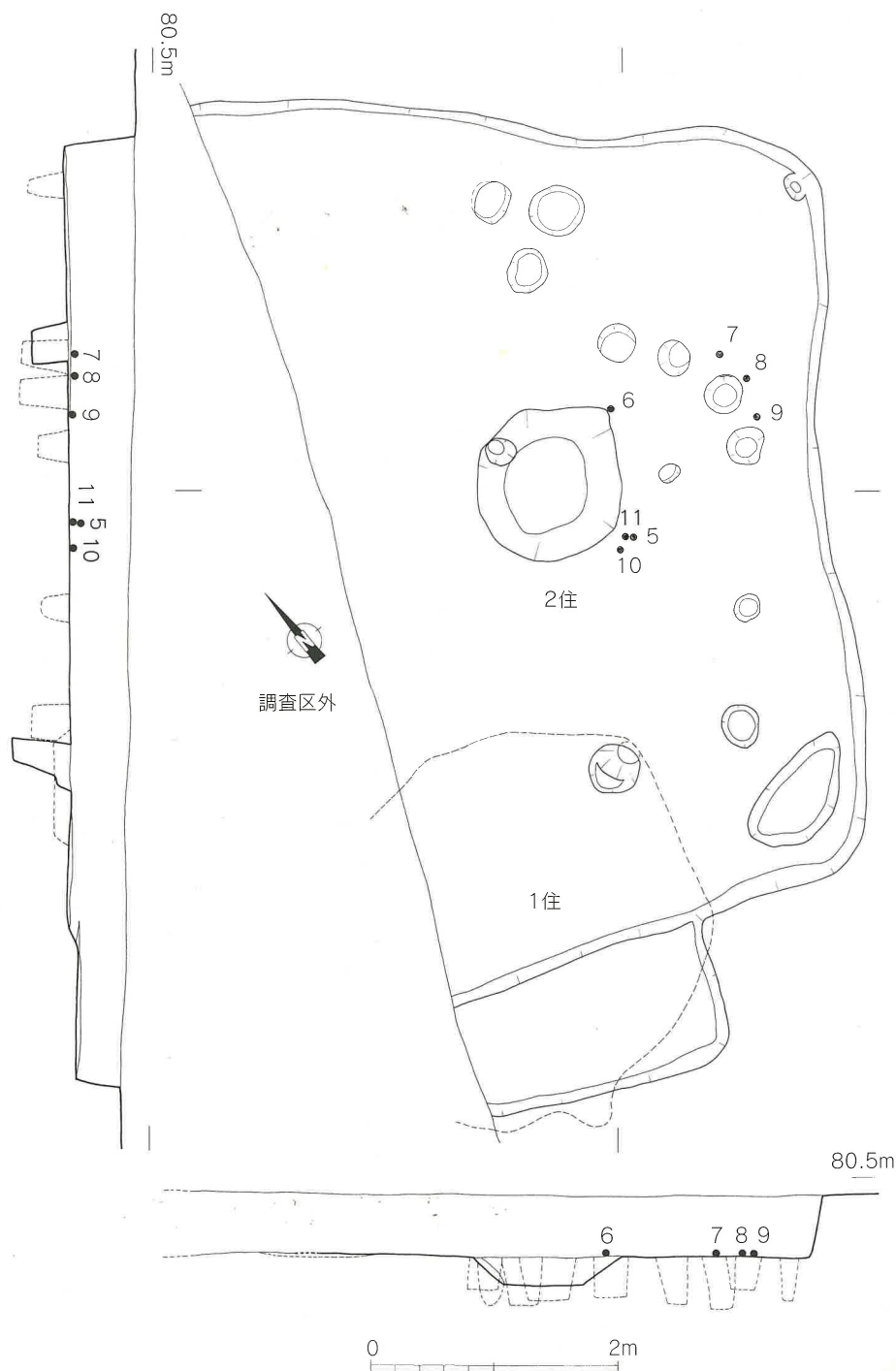
第5図 1号竪穴住居跡実測図

1号竪穴住居跡出土遺物

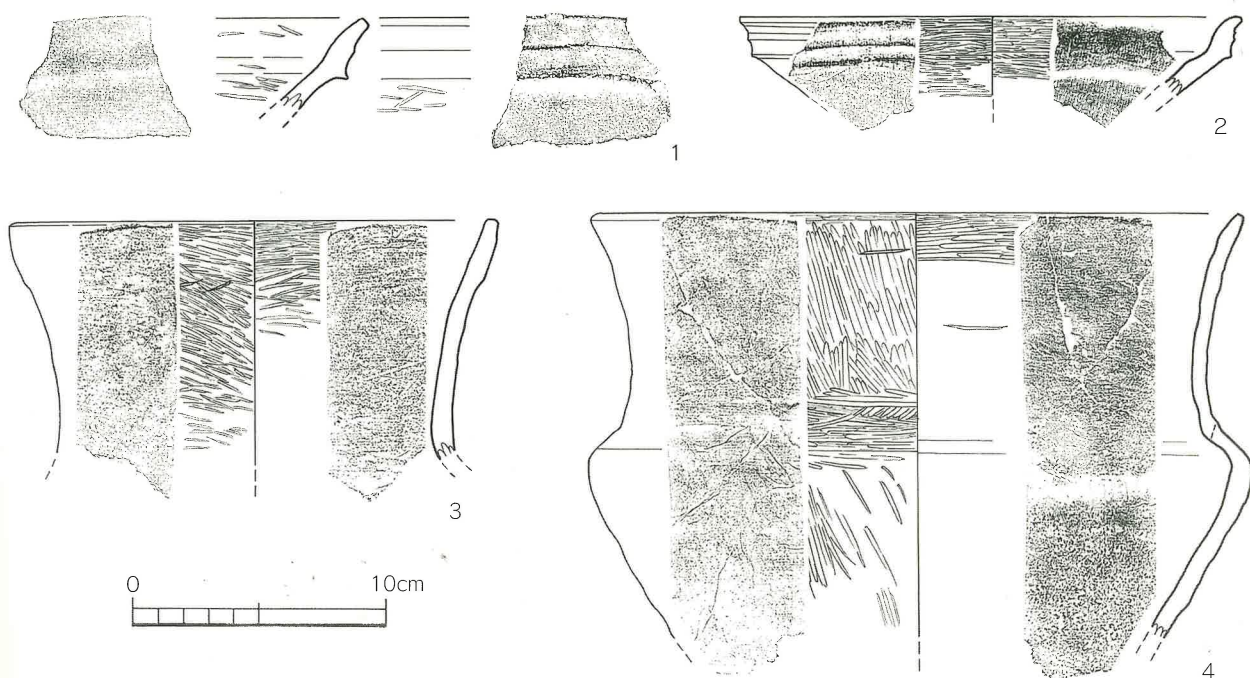
1・2は床面から10cm程浮いた状態で、3は住居南東隅の掘り方内部から、4は住居床面直上から出土した。1・2は浅鉢で口縁部に凹線文を有す。1の色調は内外面褐色で、2の色調は内外面黒褐色である。共に胎土には角閃石を含み、内外面調整は磨きを施す。1は細片であるため口径を復元できない。2の復元口径は19.7cmである。3・4は深鉢である。色調は共に内外面黒褐色で、胎土には角閃石を含む。内外面調整は磨きをそれぞれ施す。3の復元口径は18.5cm、4の復元口径は24.8cm、復元胴部最大径は25.8cmである。1・2は縄文時代後期後葉（三万田式土器）、3・4は縄文時代後期末～晩期初頭（御領式～大石式土器）と考えたい。

2号竪穴住居跡

遺構は調査区の最北端に位置するもので、1号住居から2号住居への切り合い関係を確認している。遺構の立ち上がりは明瞭で、西側は調査区外に展開すると考えられる。平面プランは方形と推定されるが、北壁と南壁が平行でなく西側に進むにつれ壁間が開く。南壁には平面形状長方形と推定される張出部を持ち、床面は平坦である。確認できる住居の規模は東西5.25m、南北7.25m（張出部を含む）、最大深56cmで、張出部は2.25m×1.08m、最大深37cm、住居床面より8cm程高い。確認された遺構中央部と南東隅には土坑を検出した。中央の土坑は長軸1.37m、短軸1.22m、最大深24cmで、埋土は暗灰色土単層で細かい炭化物を大量に含んでいた。南東の土坑は長軸1.08m、短軸58cm、最大深15cmで、埋土は褐色土単層である。主柱穴は2本確認しており、他に柱穴を10本確認した。規模は最大で直径47cm、最大深47cm、最小で直径20cm、最大深24cmである。



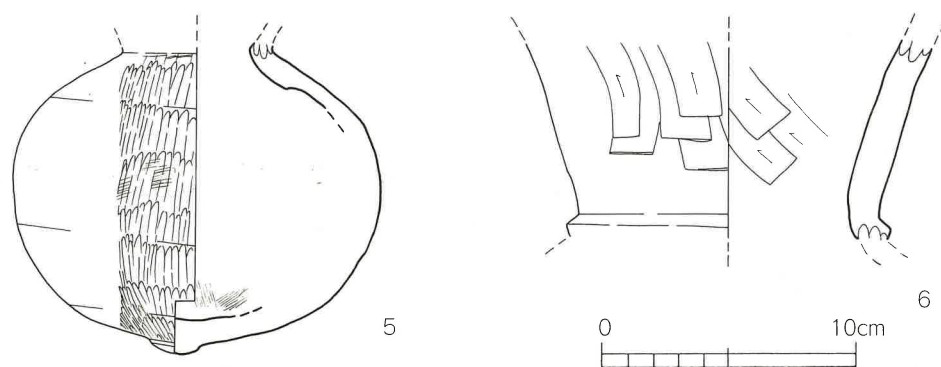
第6図 2号竪穴住居跡実測図



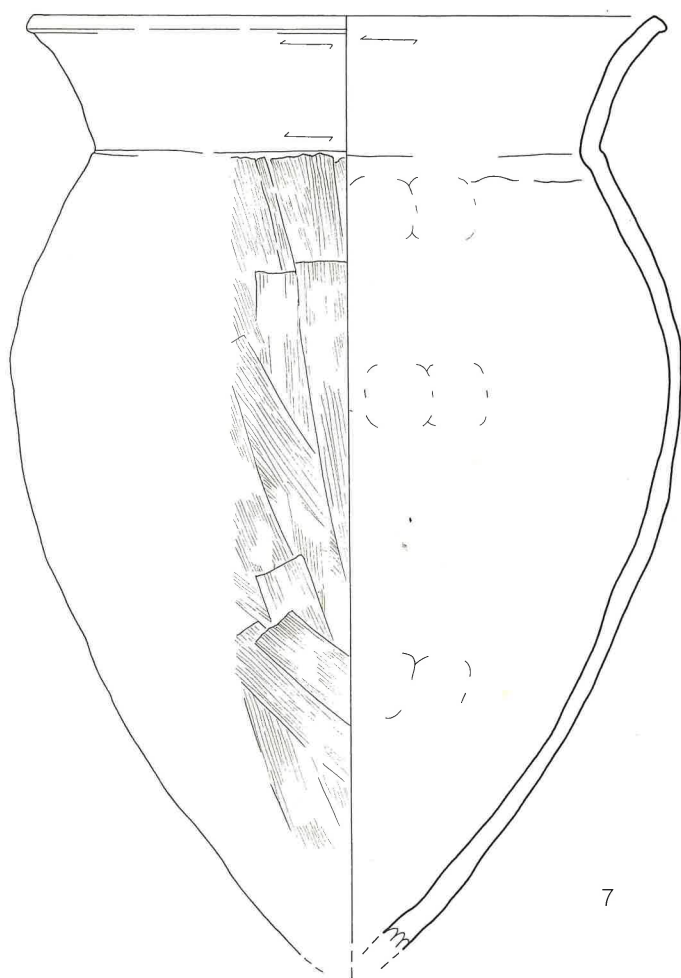
第7図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図

2号竪穴住居跡出土遺物

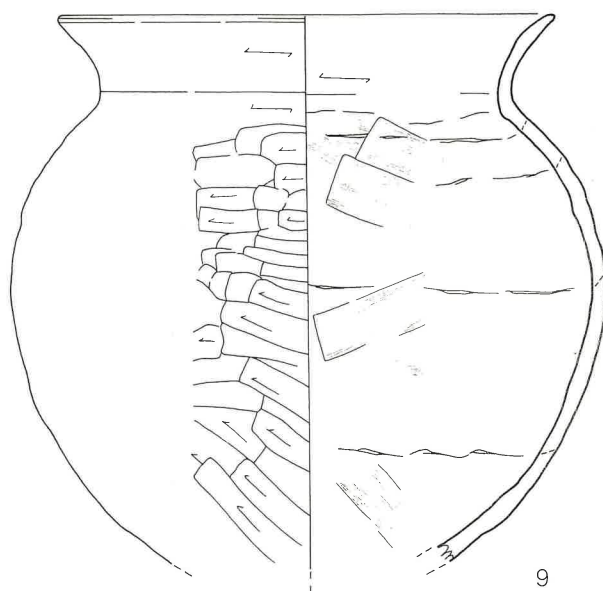
5は長頸壺の頸部から底部に至る部分である。胎土には角閃石、石英を含む。外面の調整は磨きと僅かにハケ目、内面はナデと底部に僅かにハケ目を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面共に赤褐色である。胴部最大径は14.5cmである。6は複合口縁壺の頸部で断面三角形の突帯を有す。胎土には長石、石英、角閃石を含む。調整は内外面共に削り後ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に橙色である。7は甕（底部は欠落）である。胎土には角閃石、石英を含む。外面の調整は横ナデ及びハケ目、内面は横ナデ及び指圧痕が確認でき、土器断面には粘土積み上げ痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面共に淡灰褐色である。復元口径は24.2cm、復元胴部最大径は26.5cmである。8は甕の胴部から底部に至る部分である。胎土には角閃石、石英、灰色砂粒を含む。外面の調整はハケ目及び指圧痕が確認できる他、底部をナデ調整している。内面はナデ、指圧痕、ハケ目が僅かに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面共に茶褐色である。復元胴部最大径23.1cmである。9は甕（底部は欠落）である。胎土には長石及び赤色砂粒を含む。外面の調整は横ナデと粗いヘラ削り、内面は横ナデとハケ目を確認でき、内面及び土器断面には粘土積み上げ痕を残す。焼成は良好で、色調は内外面共に淡黄褐色である。復元口径は19.5cm、復元胴部最大径は23.3cmである。10は粘板岩の扁平打製石斧片である。長さ7.8cm、幅6.3cm、厚1.1cm、重量88.2gである。11は砂岩の石皿である。長さ39.3cm、幅21.2cm、厚10.3cm、重量18.8kgである。5～9は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と考えたい。



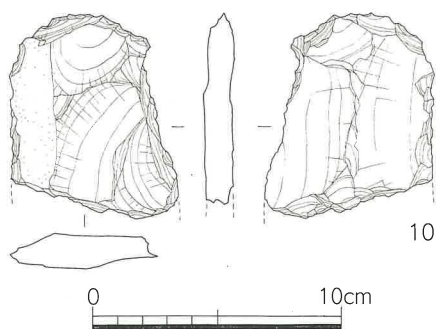
第8図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）



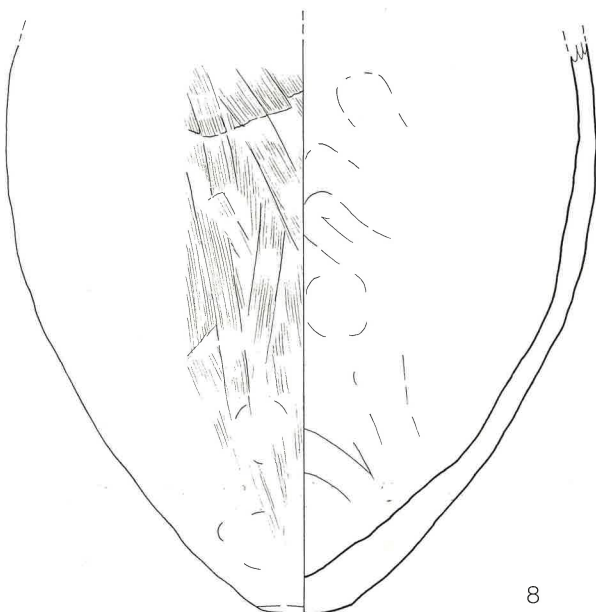
7



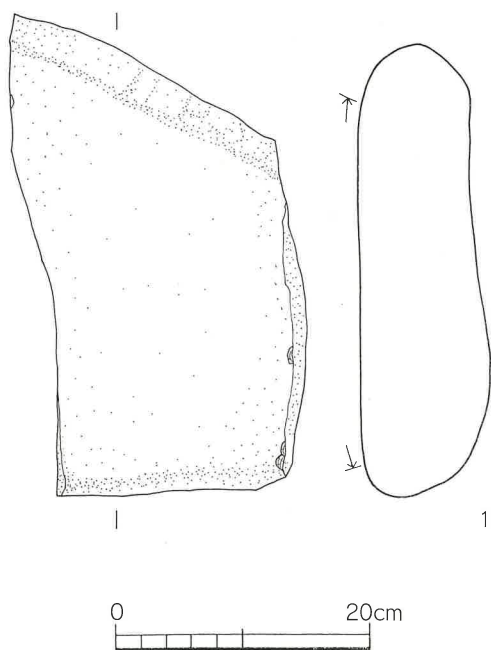
9



10



8

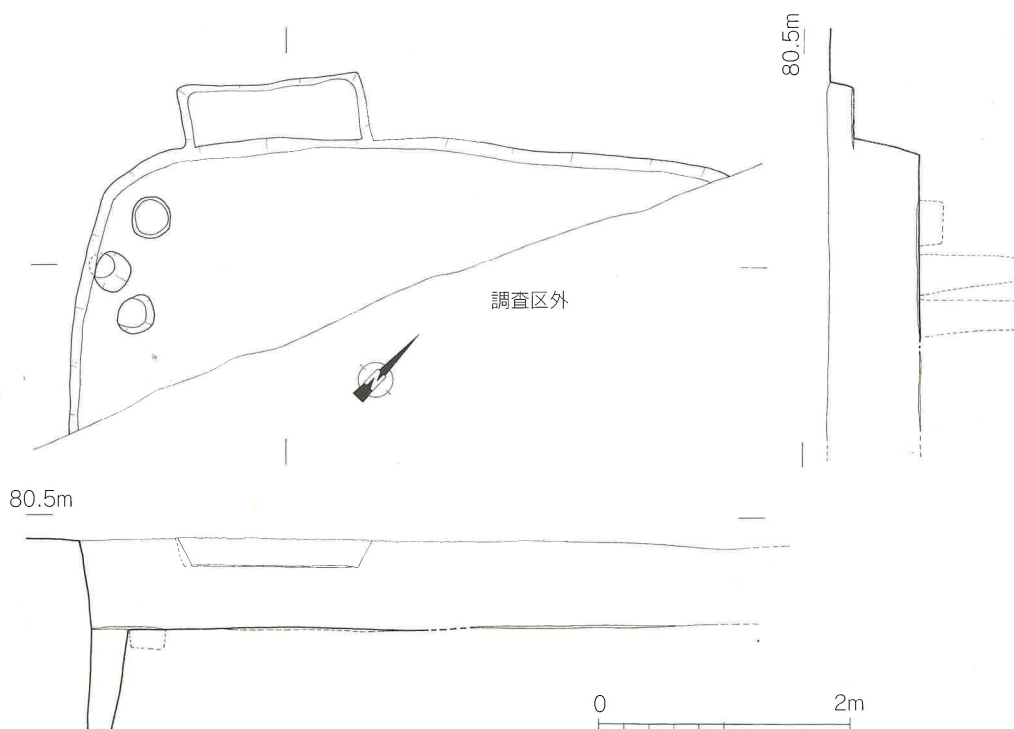


11

第9図 2号竖穴住居跡出土遺物実測図(2)

3号竪穴住居跡

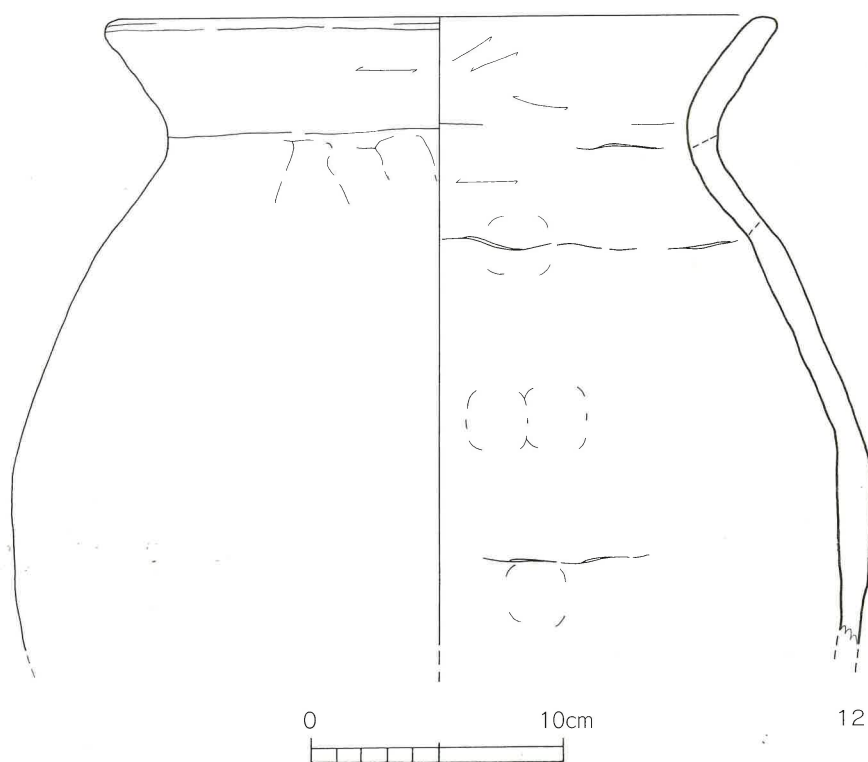
遺構は調査区の北端に位置するもので、住居東側及び南側は調査区外に展開すると考えられる。立ち上がりは明瞭で、平面プランは方形と推定される。住居西隅には平面形状長方形の張出部を持ち、床面は平坦である。確認できる住居の規模は4.95m×2.78m（張出部を含む）、最大深75cmである。張出部は1.47m×45cm、最大深23cmで、住居床面より50cm程高い。遺構内からは主柱穴を検出しておらず、南西壁沿いに柱穴を3本確認した。規模は最大で長軸32cm、短軸29cm、最大深80cm、最小で長軸33cm、短軸28cm、最大深14cmである。遺物は土器の細片及び河原石を僅かに出土したのみで、時期を特定できるものは確認されなかった。



第10図 3号竪穴住居跡実測図

4号竪穴住居跡

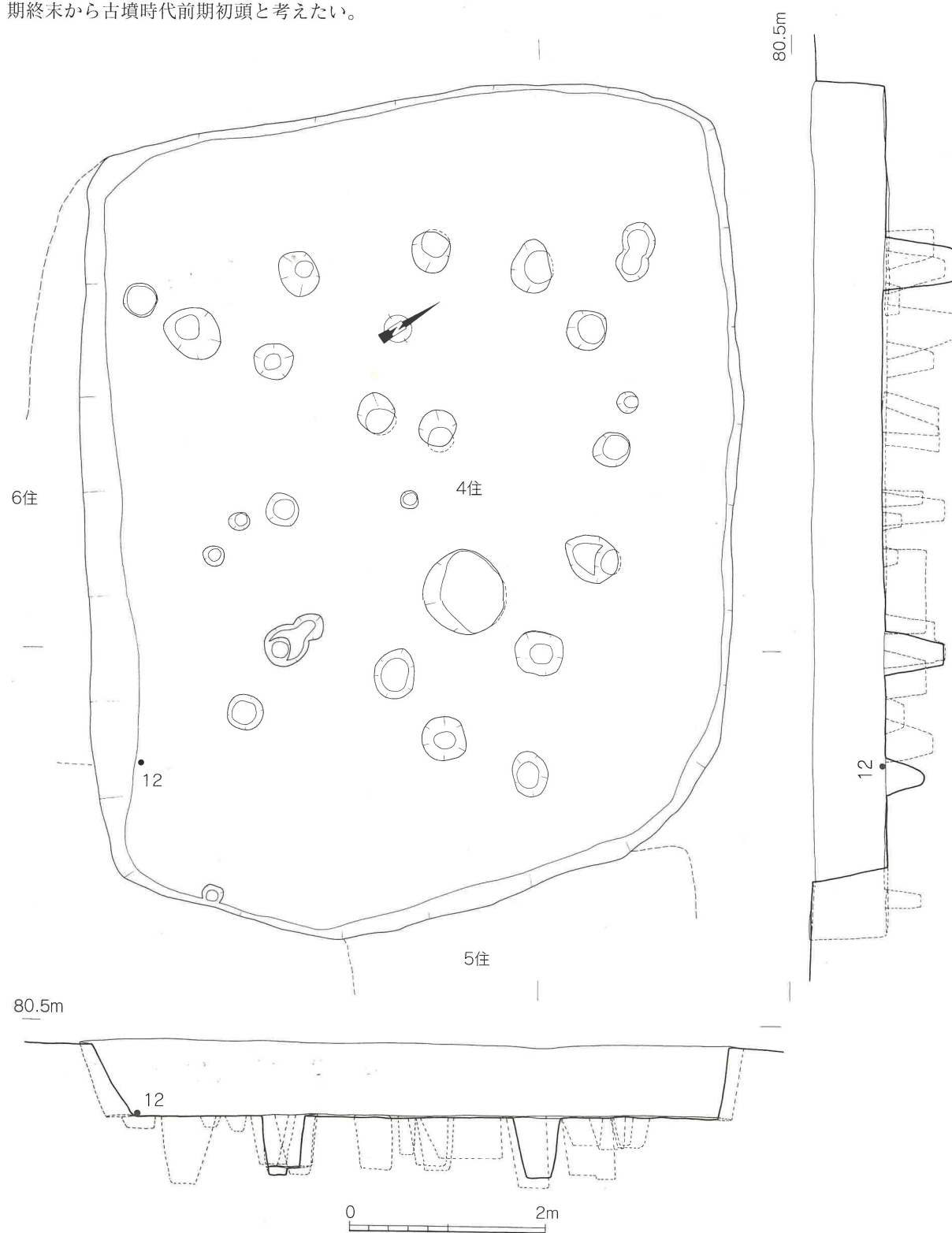
遺構は調査区の北側に位置するもので、検出面の観察から5号住居→4号住居、6号住居→4号住居への新旧関係を確認した。平面プランは歪な長方形で、立ち上がりは明瞭である。規模は8.86m×6.77m、最大深81cm、主柱穴は断定できないが、柱穴は24本（6号住居の柱穴を含む）を確認した。規模は最大で長軸80cm、短軸42cm、最大深64cm、最小で長軸21cm、短軸19cm、最大深11cmである。住居中央北東側には長軸88cm、短軸85cm、最大深43cmの土坑を確認している。



第11図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図

4号竪穴住居跡出土遺物

12は甕の口縁部から胴部に至る部分である。胎土には灰色砂粒、長石、角閃石を含む。内外面調整は指押さえ後不定方向ナデ（口縁部外面及び頸部内面のみ横ナデ）を施し、粘土積み上げ痕を断面より確認できる。焼成は良好で、色調は内外面共に暗黄褐色である。復元口径26.3cm、復元胴部最大径33.5cmである。12は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭と考えたい。

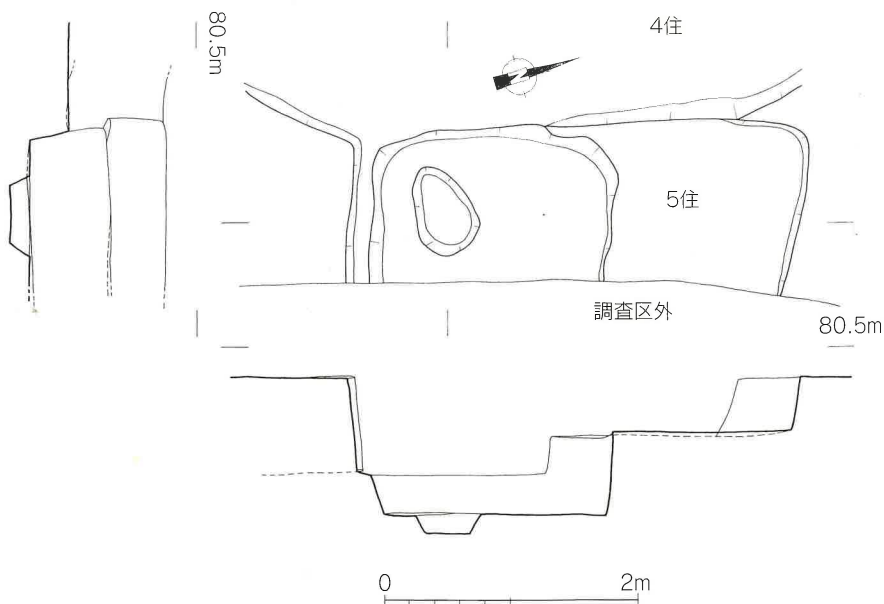


第12図 4号竪穴住居跡実測図

5号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置するもので、5号住居から4号住居への切り合いを確認している。立ち上がりは明瞭で、遺構東側は調査区外に展開するものと推定される。住居西壁は4号住居により削平されており、平面プランは方形と推定される。確認できる規模は3.62m×1.34m、最大深1.08mである。住居南側には平面形状方形と推定される掘り方がある。確認

できる規模は1.94m×1.25m、最大深67cmである。掘り方内部には長軸74cm、短軸50cm、最大深16cmの楕円形の土坑を確認した。土坑埋土は褐色土単層で、炭化物及び焼土ブロックを僅かに含んでいた。遺物は最も上段の掘り方の床面付近から、土器の細片を僅かに出土したが、時期を特定するには至らなかった。



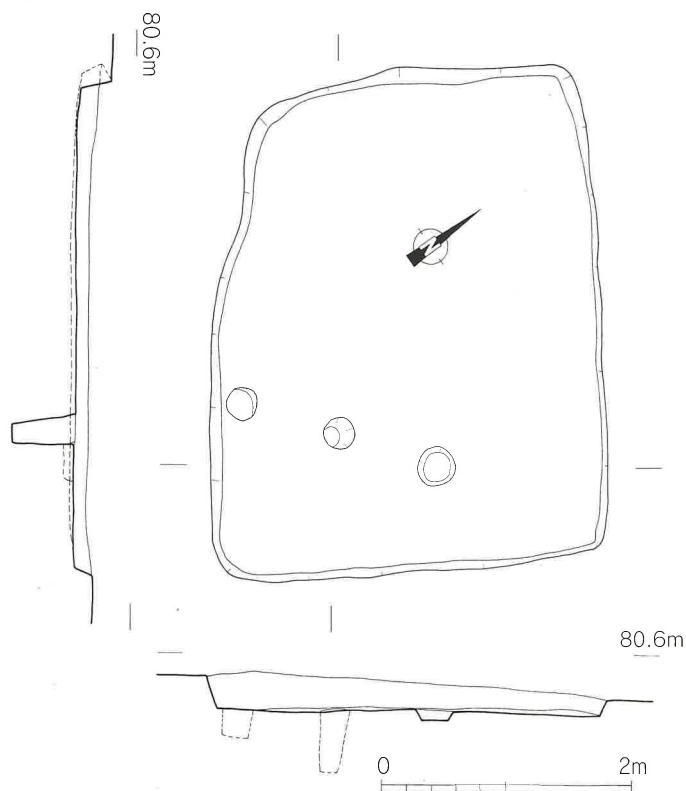
第13図 5号竪穴住居跡実測図

6号竪穴住居跡

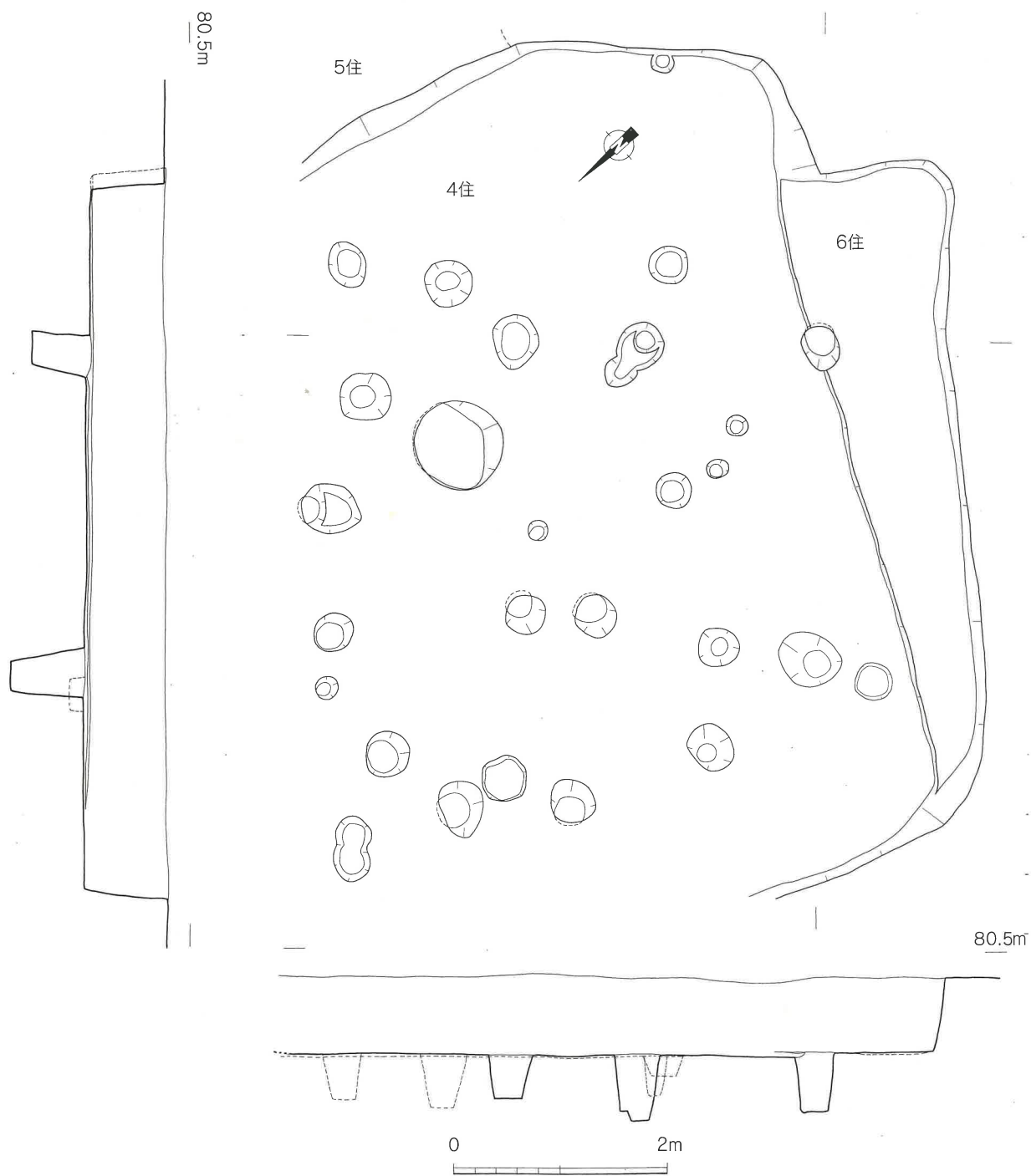
遺構は調査区の北側に位置するもので、6号住居から4号住居への新旧関係が確認されているが、当該住居の大部分は4号住居によって削平されていた。立ち上がりは明瞭で、平面プランは方形と推定される。確認できる規模は6.25m×1.62m、最大深72cmである。住居に伴う柱穴と断定できたのは4号住居残存南西壁から6号住居床面に掘削された1本のみである。規模は長軸42cm、短軸32cm、最大深57cmである。遺物は土器の細片を僅かに出土したが、時期を特定するには至らなかった。

7号竪穴住居跡

遺構は調査区の北側に位置する。平面プランは歪な長方形で、規模は3.97m×3.13m、最大深32cmである。主柱穴は断定できなかったが、住居に伴う柱穴を3本確認した。規模は最大で直径25cm、最大深52cm、最小で直径29cm、最大深8cmである。遺構内からは遺物が僅かに出土したが細片であるため時期を特定するには至らなかった。



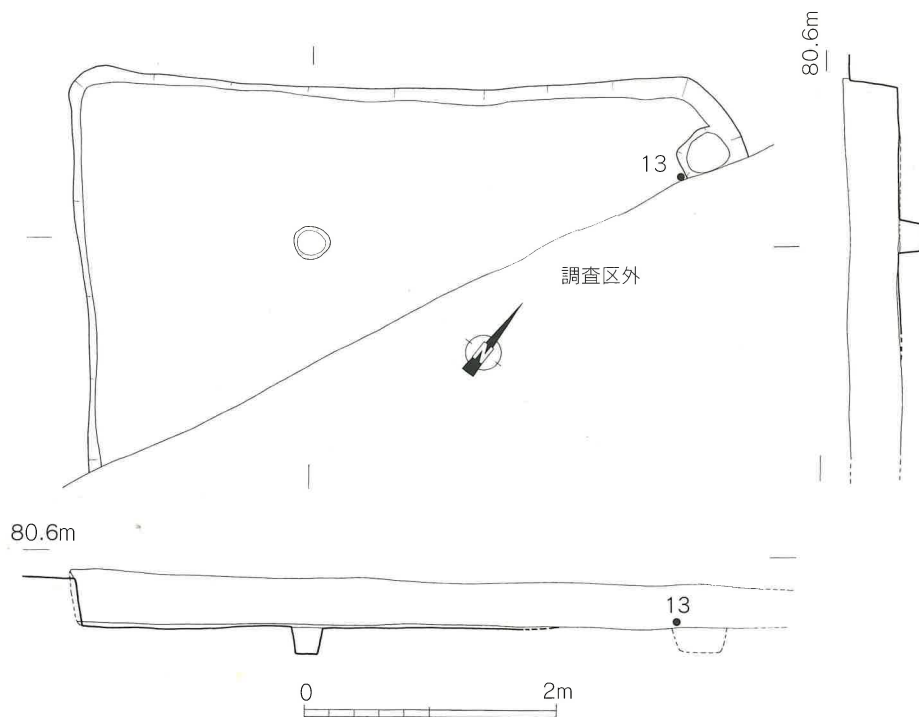
第14図 7号竪穴住居跡実測図



第15图 6号竖穴住居跡実測図

8号竪穴住居跡

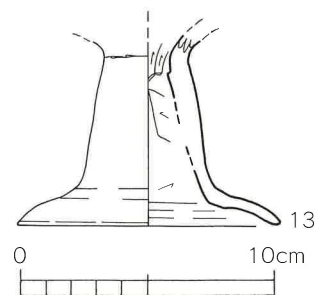
遺構は調査区の北側に位置するもので、住居北東側から南東側にかけては調査区外に広がると推定される。遺構の立ち上がりは明瞭で、平面プランは方形と推定される。確認できる規模は5.48×3.21m、最大深42cmである。住居中央部には長軸28cm、短軸25cm、最大深22cmの支柱穴と考えられる掘り方を確認した。北隅には長軸40cm、短軸34cm、最大深20cmの掘り方（東側は調査区外に広がると考えられる）を確認している。



第16図 8号竪穴住居跡実測図

8号竪穴住居跡出土遺物

13は高坏の脚部である。内外面の調整は共に削り後、ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に黄橙色である。胎土には石英と赤色砂粒を僅かに含む。復元底径は10.4cmである。13は古墳時代前期後半～中期前葉と考えたい。



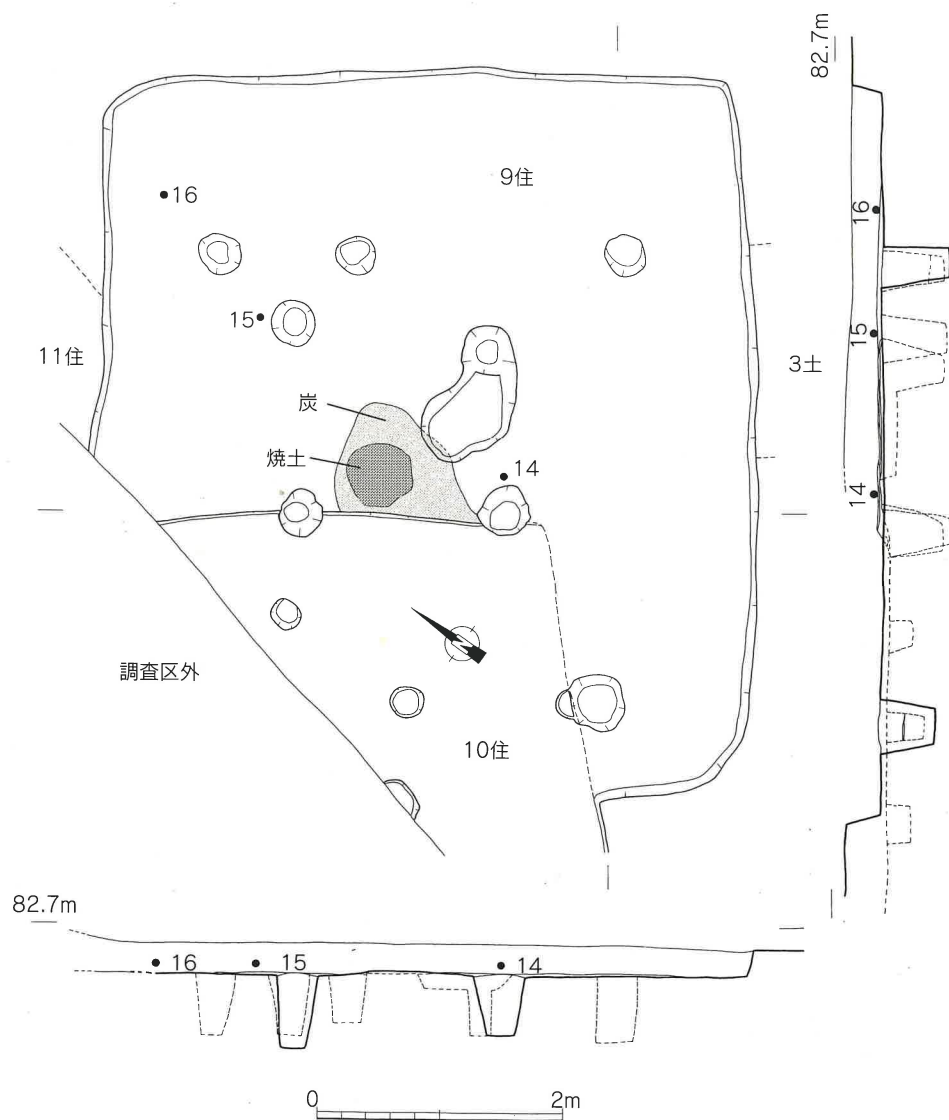
第17図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図

9号竪穴住居跡

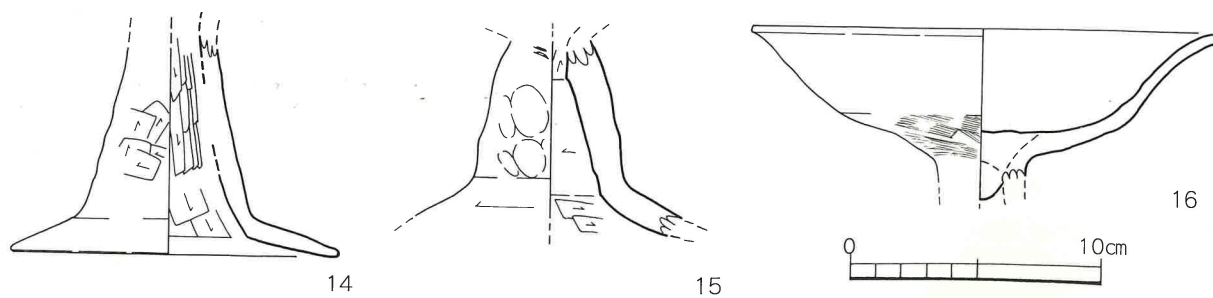
遺構は調査区の南側に位置するもので、検出面の観察より9号住居→10号住居、11号住居→9号住居、3号土坑→9号住居への新旧関係を確認した。このため9号住居南西壁の一部は削平されており、北西壁の一部も調査区外に広がると推定される。住居の立ち上がりは明瞭で、平面プランは長方形と推定される。確認できる規模は5.99m×5.41m、最大深27cmである。中央部には炉跡と推定される熱変赤色化した焼土とこれに伴うと考えられる炭の広がりを確認した。支柱穴は3本確認されており最大で長軸54cm、短軸45cm、最大深47cm、最小で直径30cm、最大深53cmである。炉跡周辺には柱穴4本と土坑1基が確認されている。柱穴の規模は最大で長軸47cm、短軸45cm、最大深54cm、最小で長軸40cm、短軸35cm、最大深53cmである。土坑の規模は1.08m×58cm、最大深52cmである。

9号竪穴住居跡出土遺物

14・15は高坏の脚部、16は高坏の坏部である。14の胎土には角閃石及び灰色砂粒を含む。外面の調整は削り後ナデと横ナデ、内面は削り及び横ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は内外面共に橙色である。復元底径は12.4cmである。15の胎土には角閃石と白色砂粒を含む。外面には指押えの後、不定方向ナデと横ナデ、内面はヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に黄橙色である。16の胎土には角閃石及び灰色砂粒を含む。外面の調整は口唇部が横ナデ、坏部から脚部にかけてはハケ目及び不定方向ナデ、内面は全面ナデ調整を施す。坏部から脚部に至る土器断面には円盤充填の痕跡がみられる。焼成は良好で、色調は内外面共に明黄橙色である。復元口径は18.3cmである。14～16は古墳時代前期後半～中期前葉と考えたい。



第18図 9号竪穴住居跡実測図



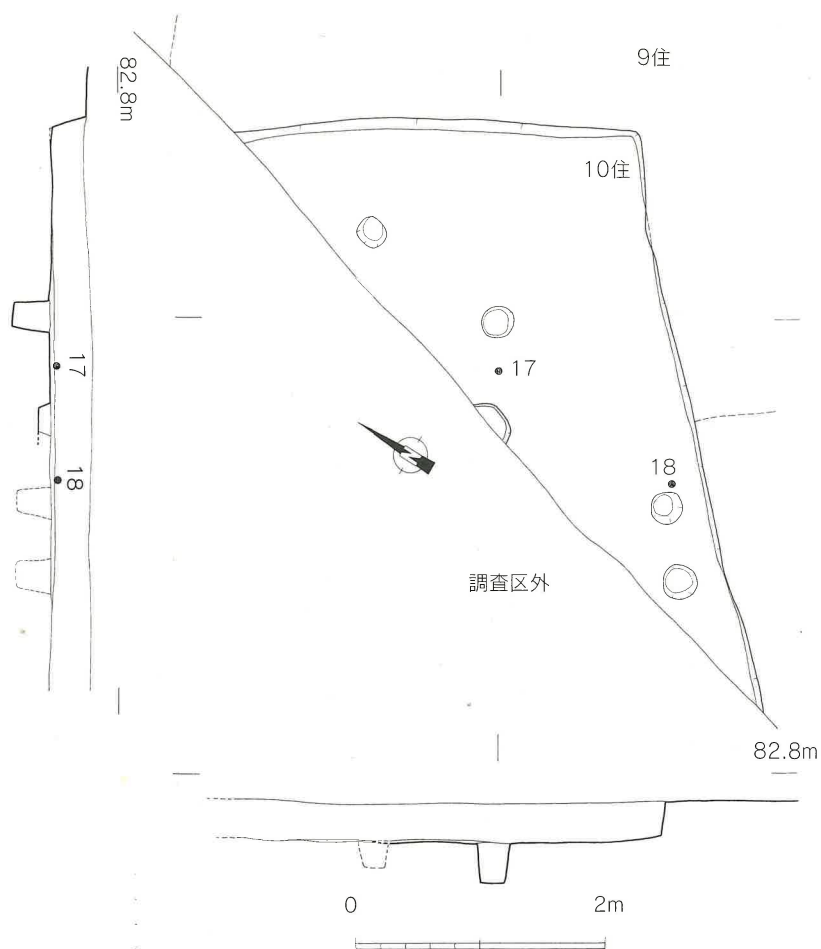
第19図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図

10号竪穴住居跡

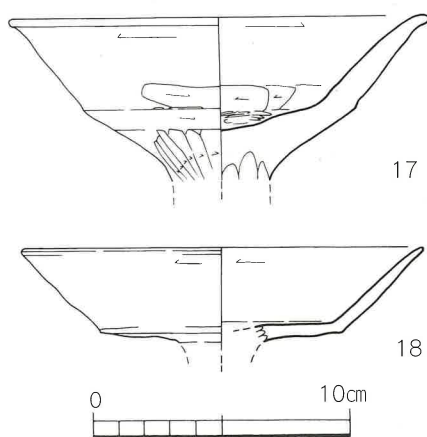
遺構は調査区の南側に位置するもので、9号住居から10号住居への切り合い関係を確認している。10号住居は9号住居より10cm程深く掘られているため第Ⅱ層（砂礫層で第4図を参照）上面を床面としている。遺構の立ち上がりは明瞭で北西壁及び南西壁は調査区外に展開すると考えられる。平面プランは方形と推定されるが、北東壁と南東壁は鈍角に開いている。確認できる規模は4.75m×3.25m、最大深32cmである。遺構内には柱穴を5本確認したが、支柱穴の断定には至らなかった。柱穴の規模は最大で長軸27cm、短軸25cm、最大深33cm、最小で長軸25cm、短軸23cm、最大深18cmである。

10号竪穴住居跡出土遺物

17・18は高坏の坏部である。17の胎土には角閃石、石英、金雲母を含む。内外面調整は横ナデ及び削りを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に黄橙色である。復元口径は16.4cmである。18の胎土には角閃石、長石、石英を含む。調整は内外面共に横ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に淡黄橙色である。復元口径は15.7cmである。17・18は古墳時代前期後半～中期前葉と考えたい。



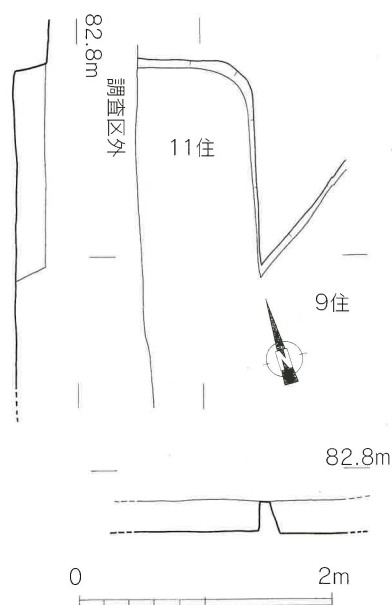
第20図 10号竪穴住居跡実測図



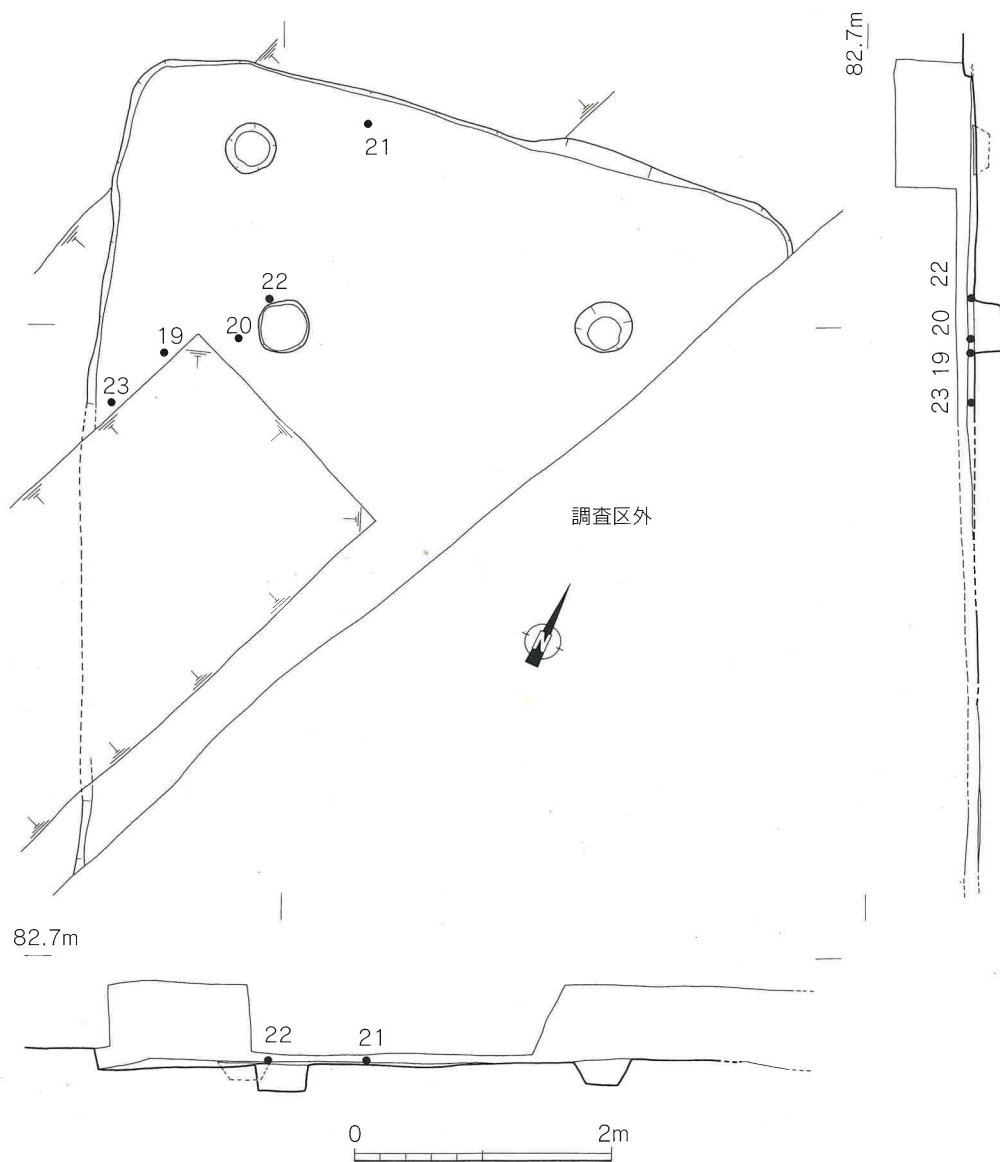
第21図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図

11号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置するもので、11号住居から9号住居への切り合い関係を確認している。住居北壁沿いの床面は10号住居と同様に第Ⅱ層（第4図参照）が露出しており、11号住居と9号住居の床面の標高差はほとんど無い。遺構の立ち上がりは明瞭で、住居の北半分は調査区外に展開すると推定され、南半分は9号住居によって大部分が削平されていると考えられる。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は1.75m×97cm、最大深27cmである。遺物は土器の細片、拳大の礫、30cm大の砂岩（未加工）を僅かに出土したものの、時期を特定するには至らなかった。



第22図 11号竪穴住居跡実測図



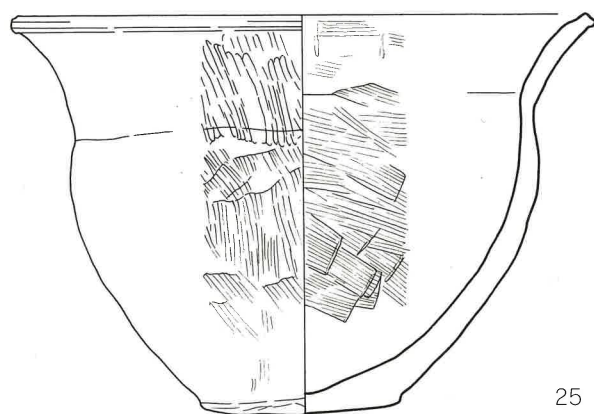
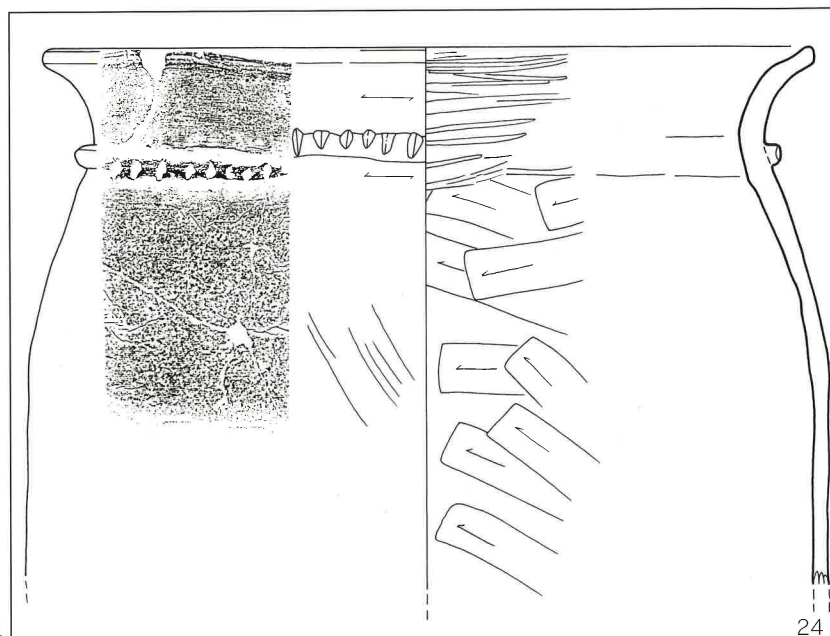
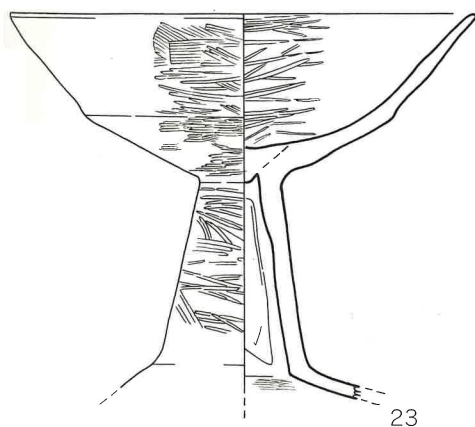
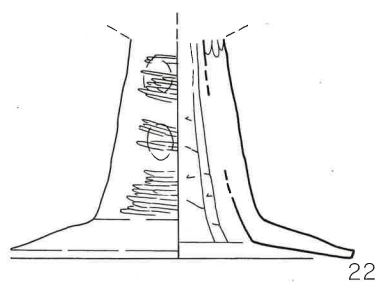
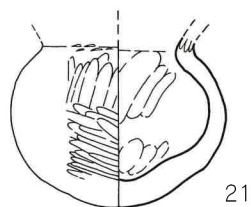
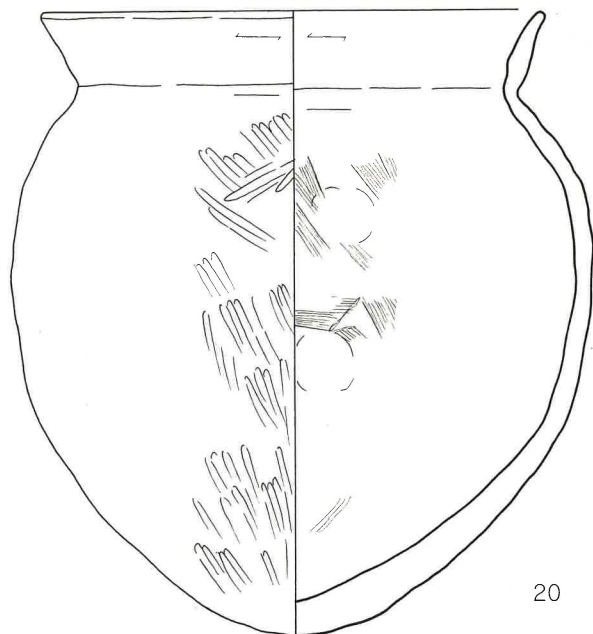
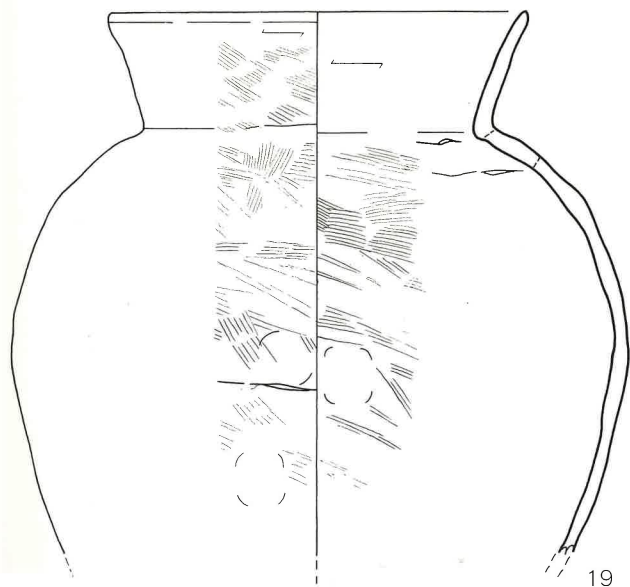
12号竪穴住居跡

遺構は調査区の南側に位置する。住居の立ち上がりは明瞭で、東壁と南壁は調査区外に広がると考えられる。北壁と西壁は部分的に攪乱を受けており、やや鋭角に広がる。床面は10号・11号住居と同様に第Ⅱ層（第4図参照）直上である。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は6.67m×5.37m、最大深62cmである。遺構内には柱穴を3本確認したが主柱穴の断定には至らなかった。柱穴の規模は最大で長軸41cm、短軸39cm、最大深21cm、最小で直径38cm、最大深13cmである。

第23図 12号竪穴住居跡実測図

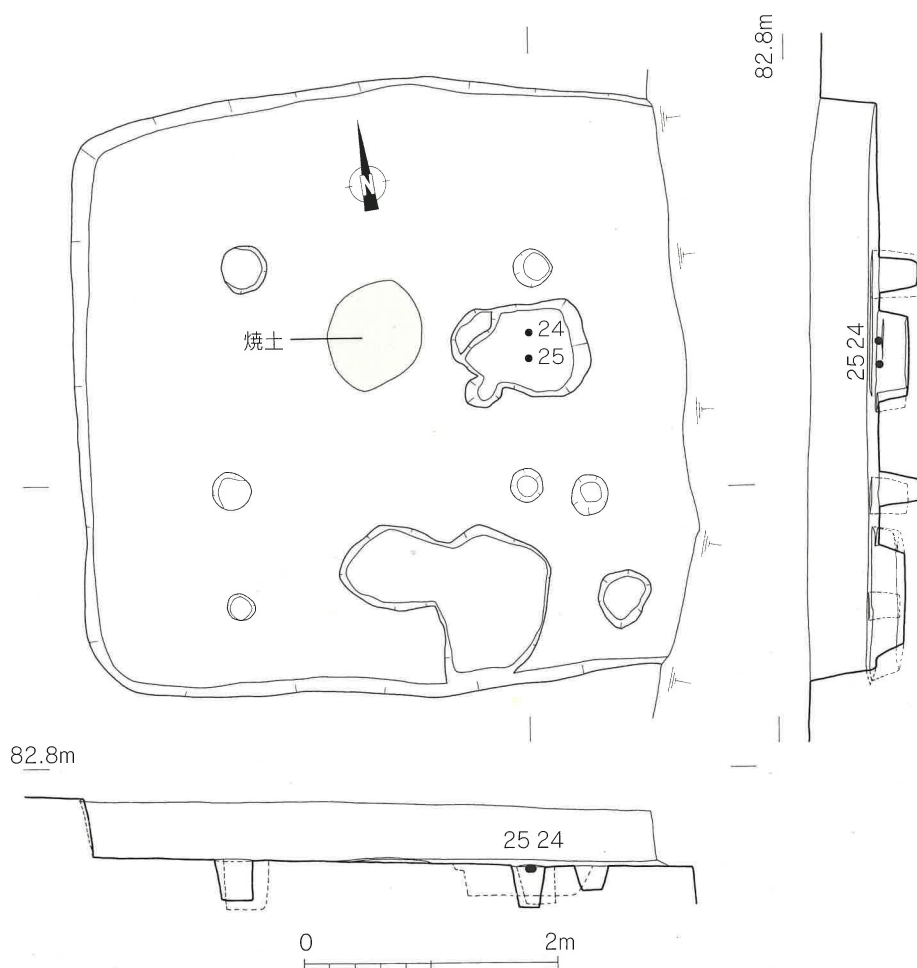
12号竪穴住居跡出土遺物

19・20は甕、21は小型丸底壺の頸部から底部、22は高坏の脚部、23は高坏である。19の胎土には角閃石、長石、灰色砂粒を含む。断面には粘土積み上げ痕がみられ、調整は口縁部のみ横ナデ、他はハケ目と指押えを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に明黄褐色である。復元口径は16.4cm、復元胴部最大径は24.1cmである。20の胎土には灰色砂粒と赤色砂粒を含む。外面の調整は口縁部が横ナデ、頸部直下から底部にかけてはヘラ磨き、内面は口縁部が横ナデ、頸部直下から底部にかけハケ目及び指圧痕、底部は指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面共に暗茶褐色である。復元口径は19.7cm、胴部最大径は22.7cmである。21の胎土には角閃石と白色砂粒を含む。外面の調整は頸部にヘラ状工具痕、頸部直下から底部にかけて削り後磨き、内面は頸部から胴部にかけて削り後ナデ、底部付近は指圧痕を確認できる。焼成は良好で、色調は内外面共に黄橙色である。胴部最大径は8.4cmである。22の胎土には角閃石を含む。外面調整は指押え後磨きと横ナデ、内面は削りと横ナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に橙色である。復元底径13.6cmである。23の胎土には角閃石と長石を含む。外面の調整はハケ目（僅かである）、ヘラ磨き、ナデ、内面はヘラ磨き、ヘラ削り、ハケ目を観察できる。坏部から脚部に至る土器断面には円盤充填の痕跡が残る。焼成は良好で、色調は内外面共に淡黄橙色である。口径は18.2cmである。19～23は古墳時代前期後半～中期前葉と考えたい。



第24图 12号竖穴住居跡出土遺物実測図

第25图 13号竖穴住居跡出土遺物実測図



第26図 13号竪穴住居跡実測図

13号竪穴住居跡

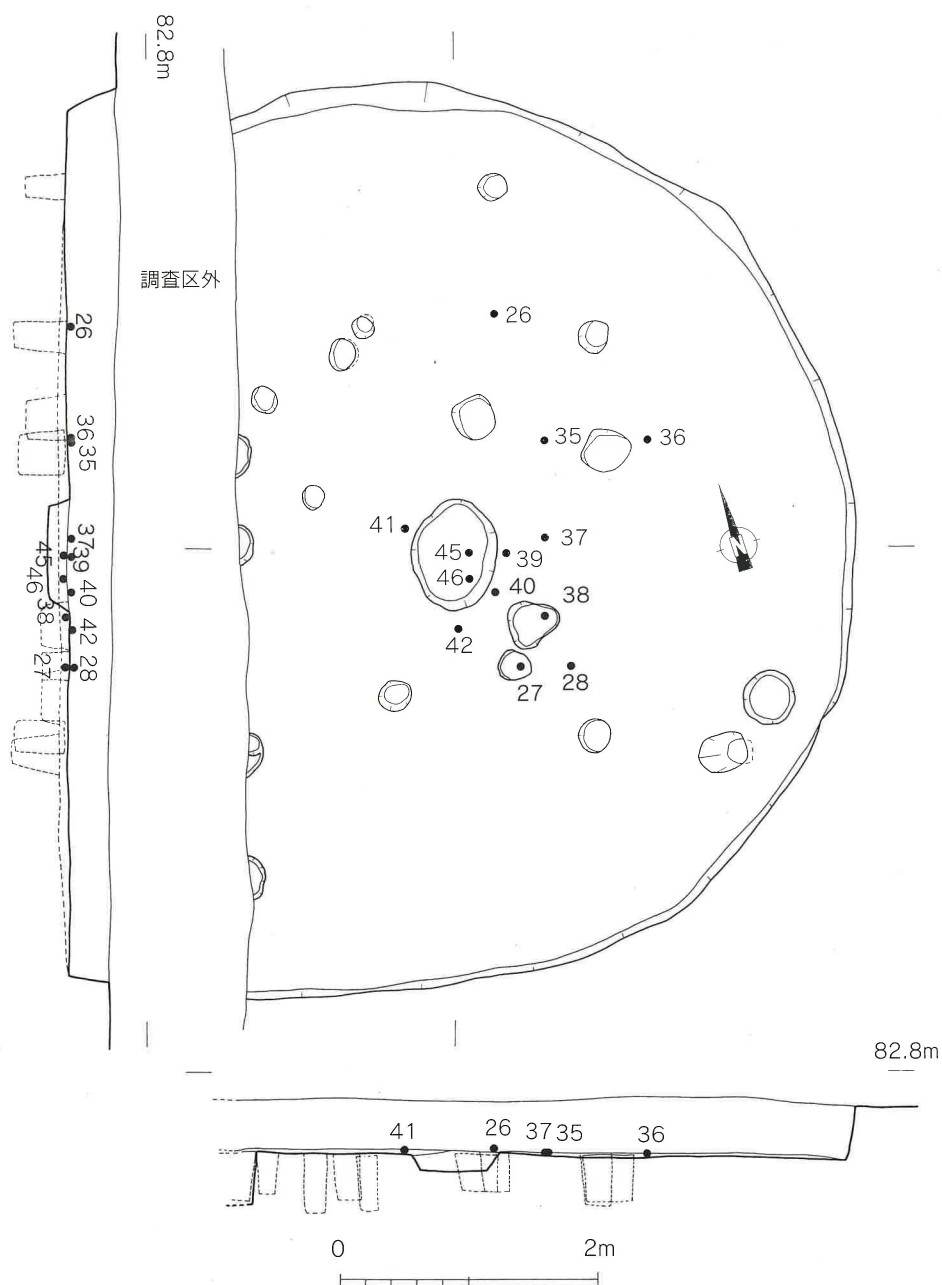
遺構は調査区の南側に位置する。住居の立ち上がりは明瞭であるが、東壁は削平されていた。平面プランは方形と推定され、確認できる規模は4.87m×4.83m、最大深47cmである。住居中央部には炉跡と考えられる熱変赤色化した焼土を確認した。主柱穴は4本を確認しており、規模は最大で直径37cm、最大深40cm、最小で直径27cm、最大深35cmである。他に遺構内からは柱穴3本、土坑2基を確認した。柱穴の規模は最大で長軸47cm、短軸42cm、最大深30cm、最小で直径20cm、最大深28cmである。土坑の規模は中央部のものが1.12m×74cm、最大深25cm、南壁沿いのものが1.68m×1.25m、最大深25cmである。

13号竪穴住居跡出土遺物

24・25は甕である。24は口縁部から胴部に至る部分で、胎土には黒雲母、角閃石、灰色砂粒が含まれており、頸部外面には断面台形の貼り付け刻み目突帯を有す。外面の調整は口縁部から頸部にかけては横ナデ、頸部直下から胴部にかけてはハケ目及び不定方向ナデとヘラ磨きを僅かに観察できる。内面は口縁部から頸部にかけてヘラ磨き、頸部直下から胴部にかけてはヘラ削り及びビナデとヘラ磨きを施している。焼成は良好で、色調は内外面共に茶褐色（外面全体に薄く煤が沈着）である。復元口径30.1cm、復元胴部最大径31.5cmである。25の胎土には角閃石、石英、灰色砂粒を含む。外面の調整は口縁部から頸部にかけては指押え、ハケ目、横ナデ、胴部はハケ目、底部は丁寧なナデ、内面の口縁部から頸部にかけては指押え、ハケ目、ナデ、胴部はハケ目、底部は指押えをそれぞれ施している。焼成は良好で、色調は外面が明茶褐色、内面が明黄褐色である。口径22.8cm、底径7.2～8.0cm、器高15.5cmである。24・25は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と考えたい。

14号竪穴住居跡

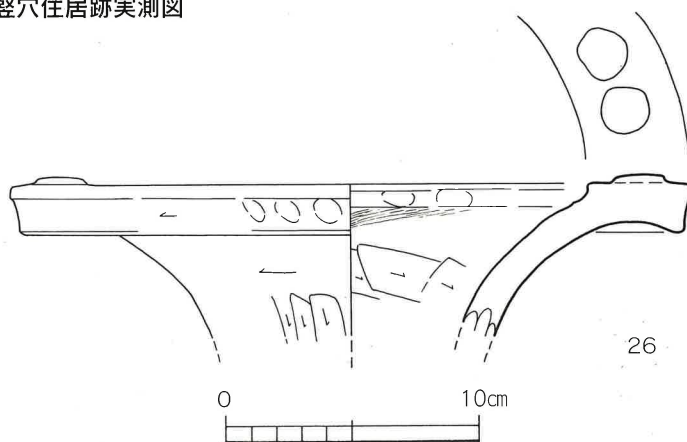
遺構は調査区の最南端に位置するもので、住居西側は調査区外に広がるものと考えられる。掘り方は極めて明瞭で、北壁から東壁は緩やかに、東壁から南壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。床面は10号～12号住居と同様に第Ⅱ層（第4図参照）直上である。平面プランはほぼ円形で、確認できる規模は直径7.21m、最大深47cmである。遺構内からは柱穴を18本確認したが、主柱穴の断定には至らなかった。柱穴の規模は最大で長軸43cm、短軸35cm、最大深40cm、最小で長軸19cm、短軸14cm、最大深42cmである。住居中央部には平面形状がやや歪な楕円形の土坑を確認している。埋土は褐色土単層で僅かに炭化物和焼土粒を含む。規模は長軸89cm、短軸68cm、最大深17cmである。



第27図 14号竪穴住居跡実測図

14号竪穴住居跡出土遺物

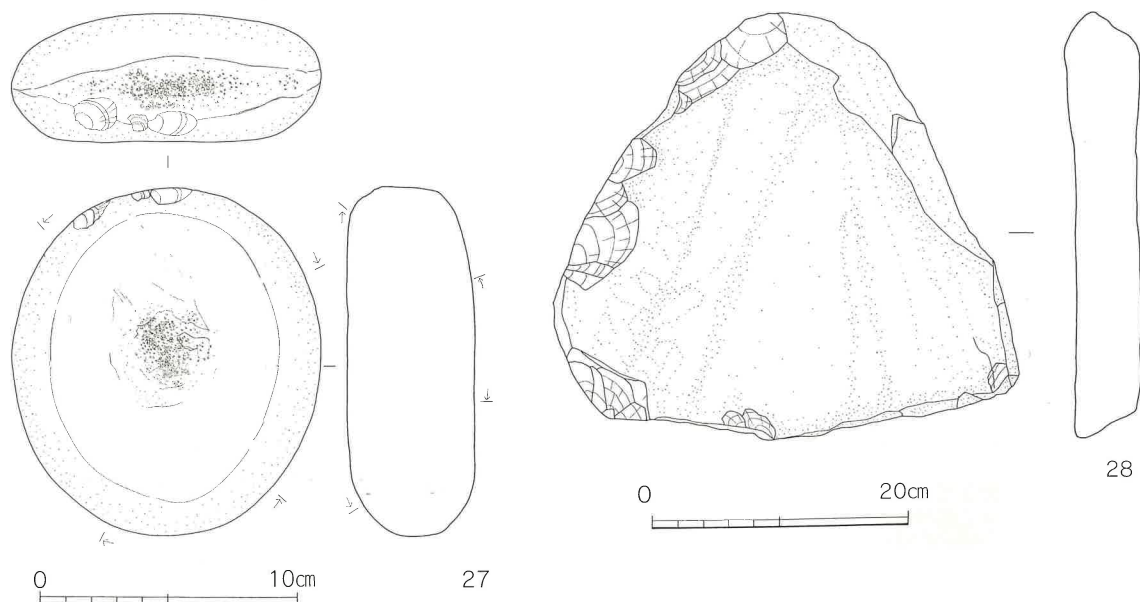
26は壺の口縁部である。口縁は鋤先状を呈し、口縁上面には円形浮文を有す。胎土には角閃石、石英を含む。調整をみると浮文付近は横ナデ、外面は指押え後横ナデ、横ナデ、削り後ナデ、内面は指押え後ナデ、ハケ目、削りを施す。焼成は良好で、色調は内外面共に黒褐色である。復元口径は26.6cmである。26は弥生時代中期末～後期初頭と考えたい。住居内からは他に磨石、台石、石鏃、石鏃未製品を出土している。



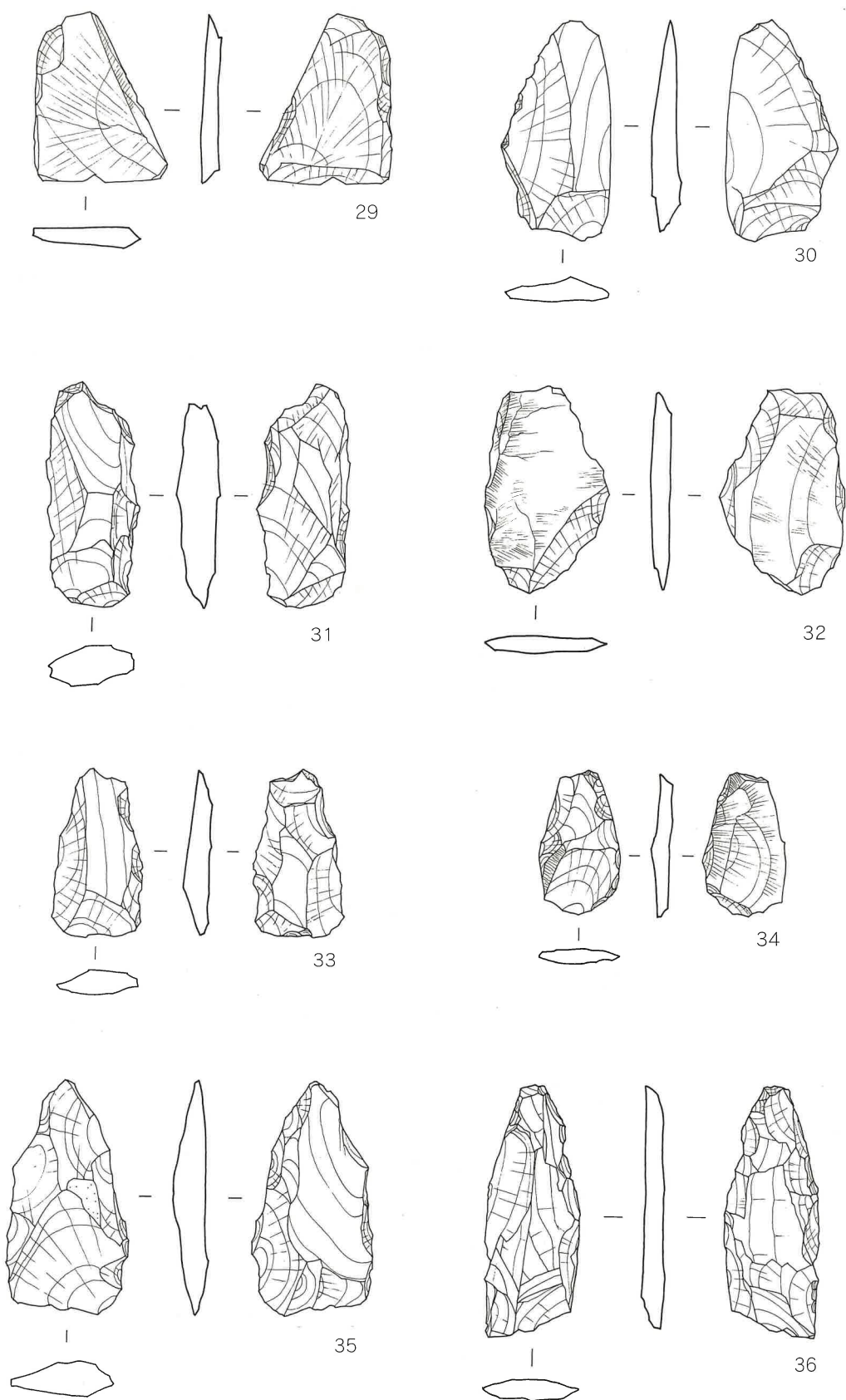
第28図 14号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）

挿図番号	遺物番号	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石 材
第29図27	14住1	磨 石	18.3	12.1	5.0	1250	砂 岩
" 28	2	台 石	35.5	33.2	5.3	13500	"
第30図29	14住一括	石鏃未製品	4.0	3.0	0.4	5.5	粘 板 岩
" 30	"	"	5.0	2.7	0.6	8.1	"
" 31	"	"	5.2	2.1	0.7	9.9	"
" 32	14住3	"	4.8	2.9	0.4	6.4	"
" 33	14住一括	"	3.8	2.0	0.6	4.5	"
" 34	14住4	"	3.3	1.9	0.3	2.1	"
" 35	14住一括	"	5.3	2.7	0.8	11.6	"
" 36	14住5	"	5.9	2.2	0.5	7.7	"
第31図37	14住一括	"	7.2	2.9	0.5	10.8	"
" 38	" 6	"	4.6	2.1	0.4	3.9	"
" 39	" 7	"	5.6	1.9	0.4	5.3	"
" 40	" 8	"	5.4	2.6	0.5	6.2	"
" 41	" 9	"	3.3	2.1	0.3	1.7	"
" 42	" 10	"	3.3	1.9	0.4	2.8	"
" 43	14住一括	磨製石鏃	1.8	1.6	0.2	0.3	"
" 44	"	"	2.0	1.3	0.2	0.5	"
" 45	14住11	"	3.4	1.3	0.3	1.1	"
" 46	" 12	"	3.7	1.5	0.3	1.4	"

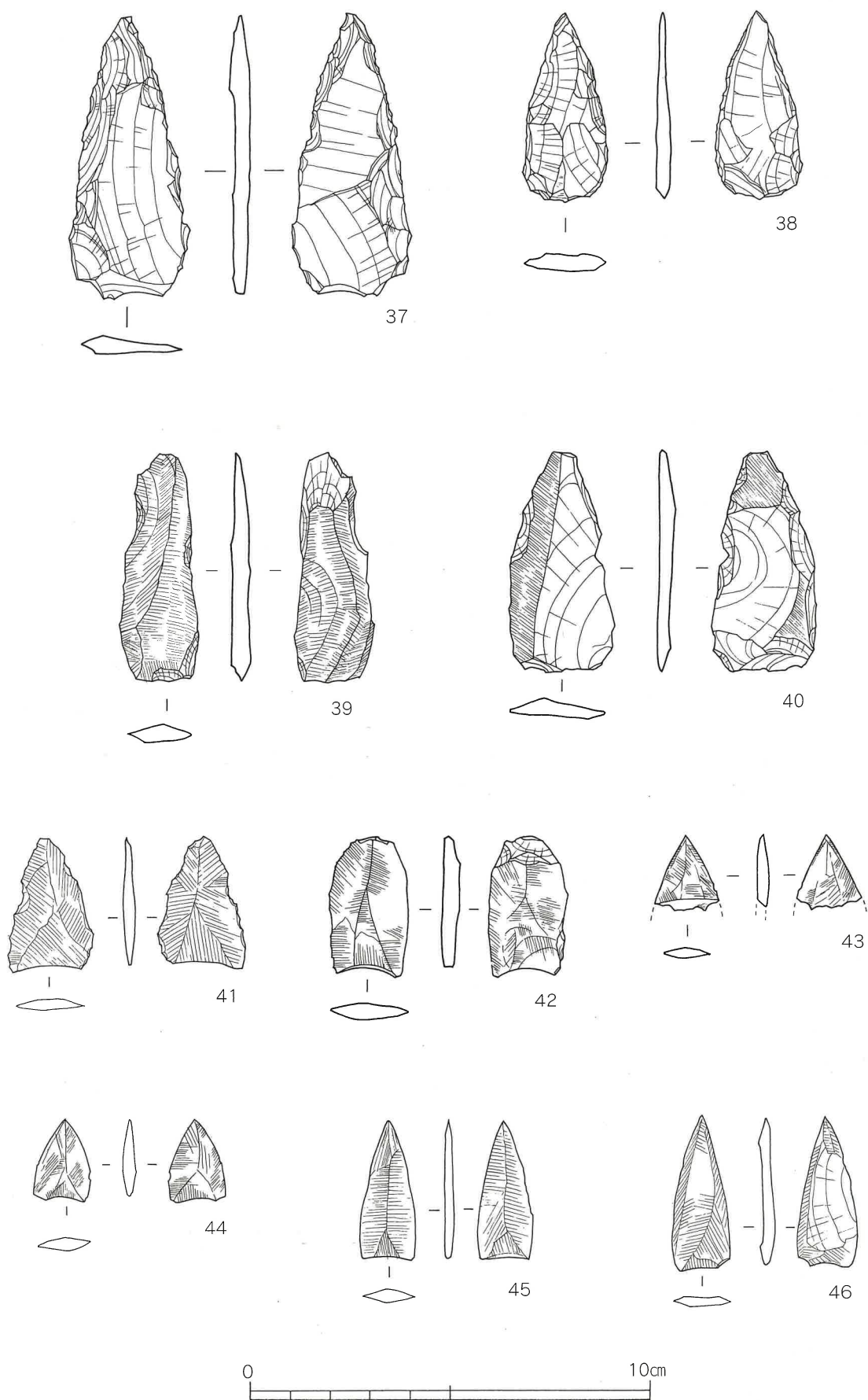
第1表 14号竪穴住居跡出土石器観察表



第29図 14号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第30图 14号竖穴住居跡出土遺物実測図(3)



第31图 14号竖穴住居跡出土遺物実測図(4)

1号土坑

遺構は調査区の北側、2号住居東隣に位置するもので、平面プランは短楕円形である。土坑の立ち上がりは明瞭で、北東隅に直径28cm、最大深30cmの掘り込みがみられる。規模は長軸1.03m、短軸97cm、最大深58cmである。土坑内から遺物は出土しなかった。

2号土坑

遺構は調査区の北側、2号住居東隣に位置するもので、平面プランは隅丸の正方形である。土坑の立ち上がりは明瞭で、北東隅に直径26cm、最大深29cmの掘り込みがみられる。規模は1.21m×1.21m、最大深60cmである。土坑内から遺物は出土しなかった。

3号土坑

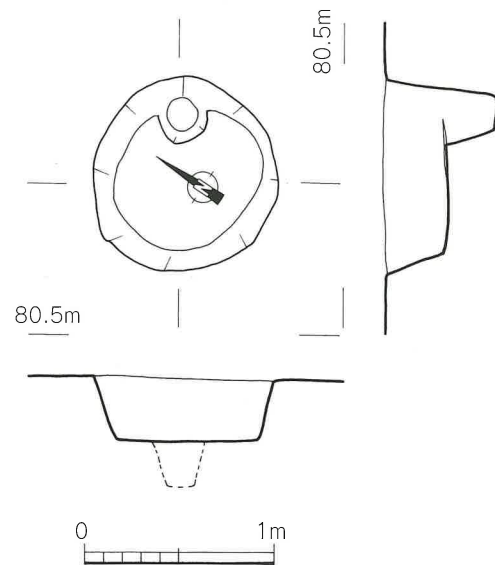
遺構は調査区の南側に位置する。3号土坑から9号住居への新旧関係を確認しており、遺構北西側は住居により削平されている。平面プランは方形と考えられ、立ち上がりは明瞭である。確認できる規模は1.77m×1.05m、最大深12cmである。土坑内から土器の細片を出土したが時期の特定には至らなかった。

1号溝状遺構

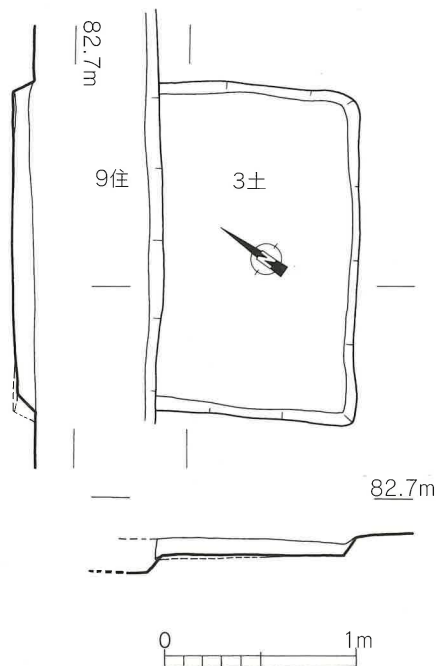
遺構は調査区の中央部、8号住居の南隣の緩斜面上に位置するもので、南東側は調査区外に続くと推定される。確認できる規模は全長3.87m、最大幅1.15m、最大深28cmである。溝内から土器の細片を出土したが時期の特定には至らなかった。

2号溝状遺構

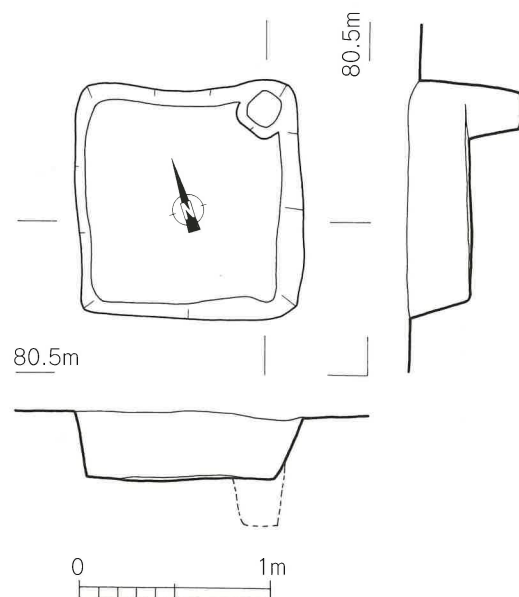
遺構は調査区の中央部に位置する。南隣の緩斜面上に位置するもので、南東側は調査区外に続くと推定される。確認できる規模は全長3.87m、最大幅1.15m、最大深28cmである。溝内から遺物は出土しなかった。



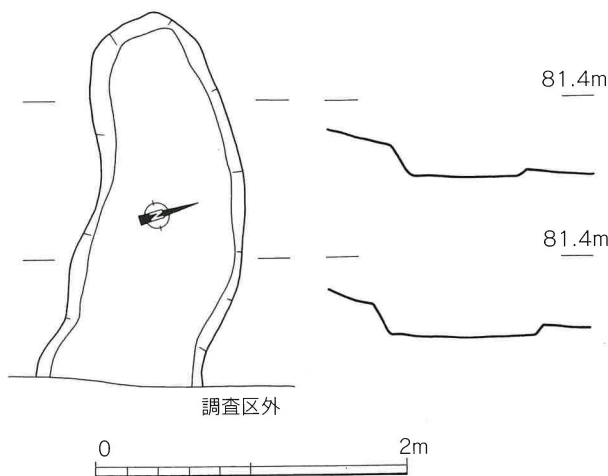
第32図 1号土坑実測図



第34図 3号土坑実測図



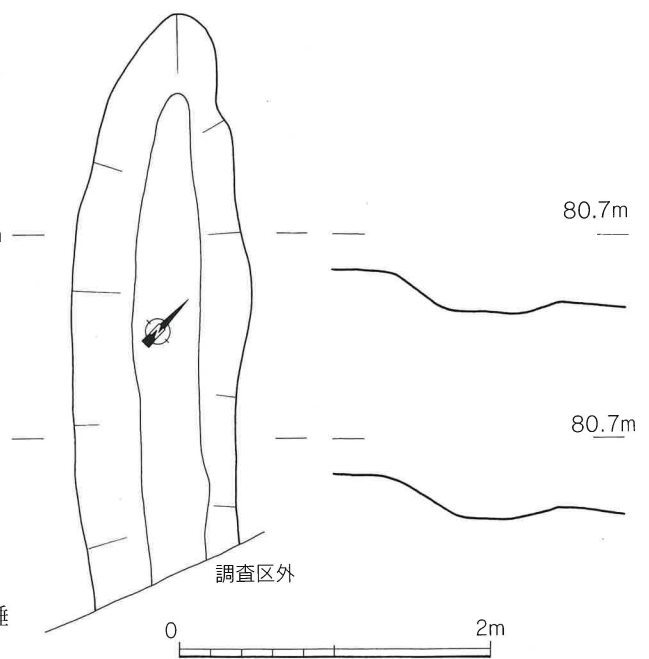
第33図 2号土坑実測図



第36図 2号溝状遺構実測図

表面採集遺物

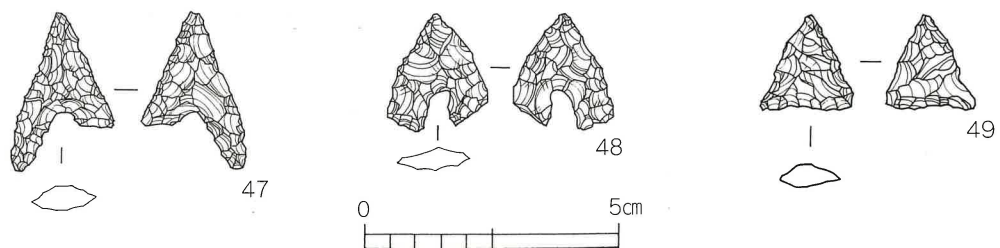
調査区外からは石鏃、扁平打製石斧、砥石、敲石、土錘が採取できた。今回は実測可能な遺物について掲載する。



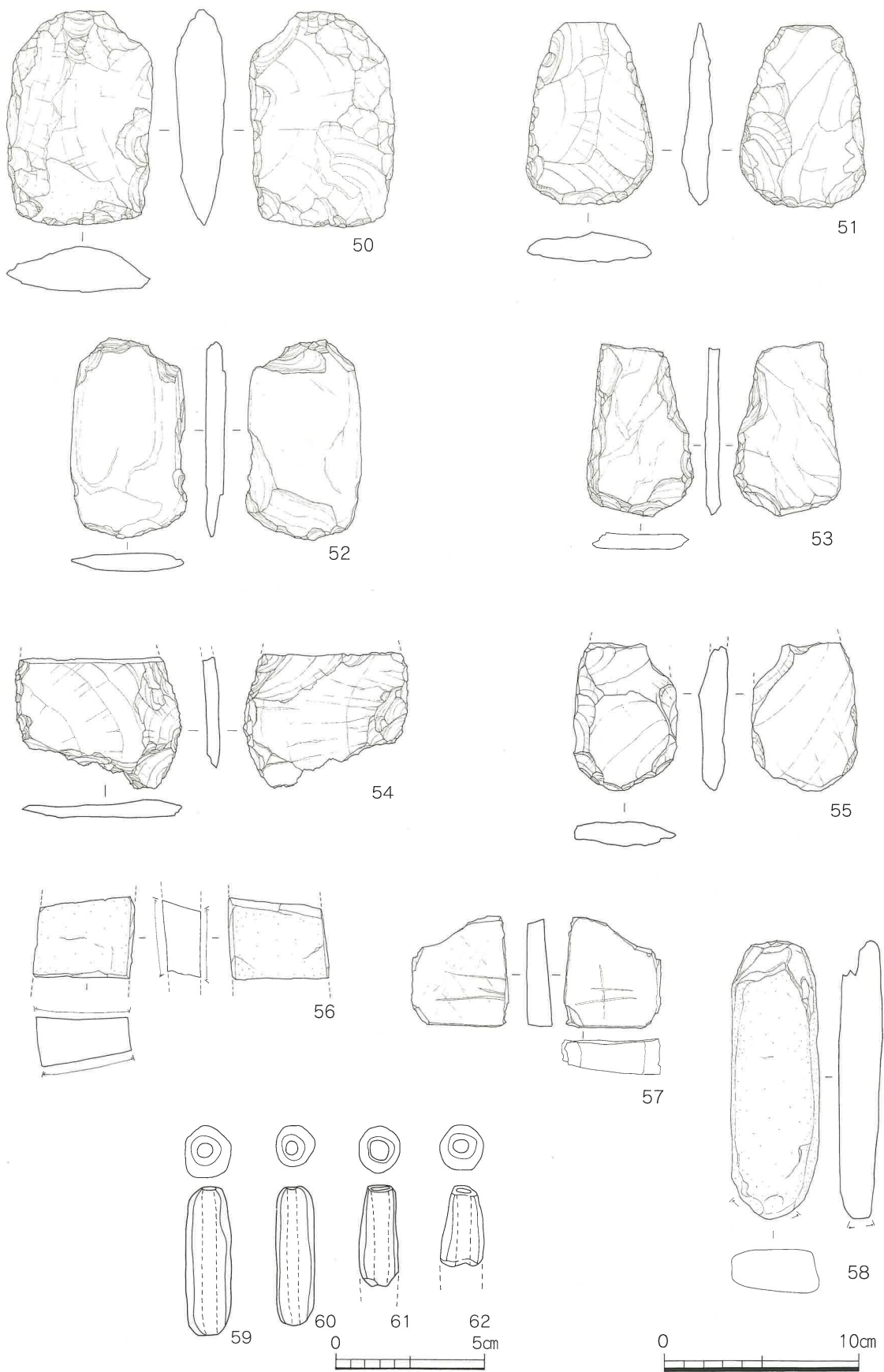
第35図 1号溝状遺構実測図

挿図番号	遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材
第37図47	表採一括	石 鏃	3.7	2.1	0.4	1.7	チャート
" 48	"	"	2.3	1.9	0.4	1.4	"
" 49	"	"	1.9	1.8	0.4	0.8	"
第38図50	"	扁平打製石斧	10.9	7.2	2.4	250.5	安山岩
" 51	"	"	9.2	6.4	1.4	105.7	粘板岩
" 52	"	"	10.3	5.6	0.9	95.7	結晶片岩
" 53	"	"	8.7	5.4	0.7	51.8	"
" 54	"	"	6.7	8.3	0.9	53.6	粘板岩
" 55	"	"	7.3	5.2	1.1	63.3	"
" 56	"	砥 石	4.1	4.9	2.7	85.0	結晶片岩
" 57	"	"	5.4	4.8	1.6	64.3	頁 岩
" 58	"	敲 石	14.2	4.5	1.9	233.6	粘板岩
" 59	"	土 錘	5.3	1.9	—	12.3	土製品
" 60	"	"	4.8	1.5	—	8.2	"
" 61	"	"	3.6	1.7	—	5.2	"
" 62	"	"	2.9	1.6	—	4.6	"

第2表 表面採集遺物観察表



第37図 表面採集遺物実測図 (1)



第38図 表面採集遺物実測図 (2)

Ⅳ. まとめ

確認された遺構の時期は、縄文時代後期末～晩期初頭1基（1号住）、弥生時代中期末～後期初頭1基（14号住）、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭3基（2号住・4号住・13号住）、古墳時代前期後半～中期前葉4基（8号～10号住・12号住）、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭以前2基（5号住・6号住）、時期不明遺構6基及び2条（3号住・7号住・11号住・1号～3号土坑・1号溝・2号溝）である。

堂ノ間遺跡における縄文時代の遺物は平成6年度農村総合整備事業本匠村地区（県営圃場整備事業）に伴う堂ノ間遺跡発掘調査報告書の中ですでに取り上げられており⁽¹⁾、13号住の出土遺物1～4が加わることで後期から晩期にかけての連続性を充足するものとなった。さらに、後期から晩期にかけての住居跡が確認されたことは番匠川流域では初めてとなる。県内でも同期の住居が確認された例は極めて少なく、今のところ竹田市天神面遺跡の住居跡のみである⁽²⁾。しかしながら、後期から晩期にわたる方形竪穴住居と円形竪穴住居の変遷から考えてみると、天神面遺跡（方形）－堂ノ間遺跡（円形）－犬飼町下野遺跡（円形）⁽³⁾・直入町横枕遺跡（方形）⁽⁴⁾の流れを補完することができる⁽⁵⁾。

弥生時代についても前記の堂ノ間遺跡報告書中で、試掘調査時に中期の円形竪穴住居跡及び遺物を確認していることから⁽⁶⁾、14号住と合わせ、同期にはすでに集落が形成されていた可能性が高いといえる。さらに、住居内から出土した石鏃及びその未製品から磨製石鏃の製作工程を伺い知れたことは興味深い発見であった。2号住・4号住・13号住をみると後期終末から古墳時代前期初頭まで連続的に集落が形成された可能性を伺わせるものがある。13号住の出土遺物24・25は宮崎平野を中心とした地域の土器系譜につながるものであるが⁽⁷⁾⁽⁸⁾、この様相は平成8年から9年にかけて発掘調査が実施された大分県佐伯市の檜野古墳にもみられる⁽⁹⁾。古墳から出土した遺物と今回、堂ノ間遺跡で確認された遺物とは時間的な差があるものの、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭には、すでに、番匠川流域にまで宮崎平野の土器が浸透していることが裏付けられた。しかしながら、確認されている遺構・遺物が僅かなことから詳細については今後の資料の増加に期待したい。

古墳時代を見ると前期後半から中期前葉に住居の時間的集中がみられる。住居の切り合い関係も確認された住居跡の中では最も複雑で、遺構の密集度の高さと集落の展開を伺い知れる。予想以上の集落が想定されことから、古墳の存在が考えられたため、調査区周辺の踏査及び字名調査を実施したが成果をあげるには至らなかった。

遺跡の立地する番匠川上流域をみると標高600m級の山々に取り囲まれてひとつの空間を形成しているように観察される。しかしながら、縄文時代では前高洞穴⁽¹⁰⁾、桜原遺跡⁽¹¹⁾、立平遺跡⁽¹²⁾に代表されるように、豊後水道沿岸から九州山地の深部に至る広範な地域での人々の活動が観取できる。弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭には宮崎平野の影響を直接あるいは間接的に受け、古墳時代前期後半～中期前葉には確実に集落を形成していたことが判明している。今後、この閉鎖的地勢に捉われることなく番匠川上流域の古環境を復元していかなくてはならない。

大分県南海部郡の縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の分布をみると、偏重した傾向が伺える。まず、番匠川流域の本匠村と直川村、そして、日向灘に注ぐ北川の源流をいただく宇目町にその多くが集中している。確認されている遺跡を見ても散布地が多く、その実態が解明されているのは少数である。このような中で、今回、報告した堂ノ間遺跡は、当地域の諸相を解きあかす絶好の機会を与えてくれたものといえる。

註

(1) 後藤一重編『堂ノ間遺跡』本匠村教育委員会 1997 7～21頁

(2) 城戸 誠『竹田地区南部遺跡群』II 竹田市教育委員会 1991 10～20頁

(3) 中野宏一 原田昭一 吉田寛『下野遺跡』国道10号線犬飼バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(1) 犬飼町教育委員会 1994 6～7頁

(4) 高橋信武『横枕遺跡・日向塚遺跡』直入町教育委員会 1988 12～13頁

(5) 高橋信武「縄文晩期の方形竪穴住居跡について」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 1998 692頁 で「鳥井原式段階の天神面遺跡(方形)の後資料的空白が続き、古閑式古段階になって下野遺跡(円形)・横枕遺跡(方形)の資料がみられる。現状では御領式段階の状況が不明だが、この間に方形はいったん途絶えたとも考えられる。」としている。

(6) 後藤一重編『堂ノ間遺跡』本匠村教育委員会 1997 2頁

(7) 吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察-須恵器出現以前の資料を中心として-」『宮崎考古』第14号 宮崎県考古学会 1995 21～22頁から出土遺物24・25は1型式(宮崎平野における弥生時代後期後半以来の伝統を持つ在地系甕)の系譜上に位置するものと考えたい。

(8) 宮崎県教育委員会編『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 本文編 宮崎県教育委員会 1988 97～98頁 から出土遺物24・25は前原北Ⅳ式併行期に比定されるものと考えられる。

(9) 吉武牧子『檜野古墳』佐伯市教育委員会 1998 33頁 で「小型丸底壺の特徴も併せて考えると溝出土土器は前原北Ⅵ式b～Ⅶ式a併行期に比定され、年代は5世紀中頃～後半前後と考えられる。」としている。

(10) 坂田邦洋「前高洞窟遺跡の研究」『史学論叢』別府大学史学研究会 1979

(11) 賀川光夫他『大分県史』先史篇Ⅰ 大分県 284頁

(12) 賀川光夫他『大分県史』先史篇Ⅰ 大分県 284～285頁

『堂ノ間遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
28	6	13号住	1号住

版 图 真 写

堂ノ間遺跡遠景（南から）



堂ノ間遺跡遠景（北から）





堂ノ間遺跡北側近景（南から）



堂ノ間遺跡北側近景（西から）

堂ノ間遺跡南側近景（南から）



堂ノ間遺跡南側近景（西から）



図版4



調査風景



1号竪穴住居跡

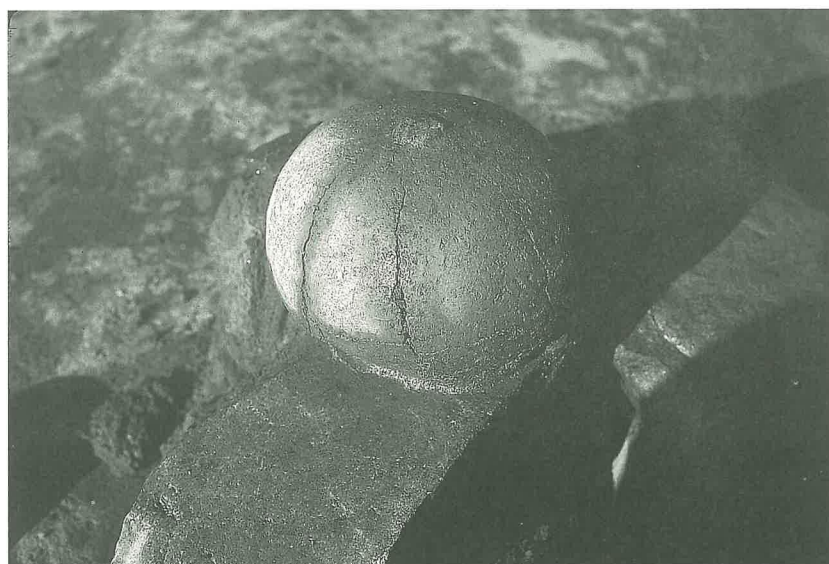


1号竪穴住居跡遺物出土状況

2号竖穴住居跡



2号竖穴住居跡遺物出土状況



3号竖穴住居跡





4号～6号竪穴住居跡



5号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡

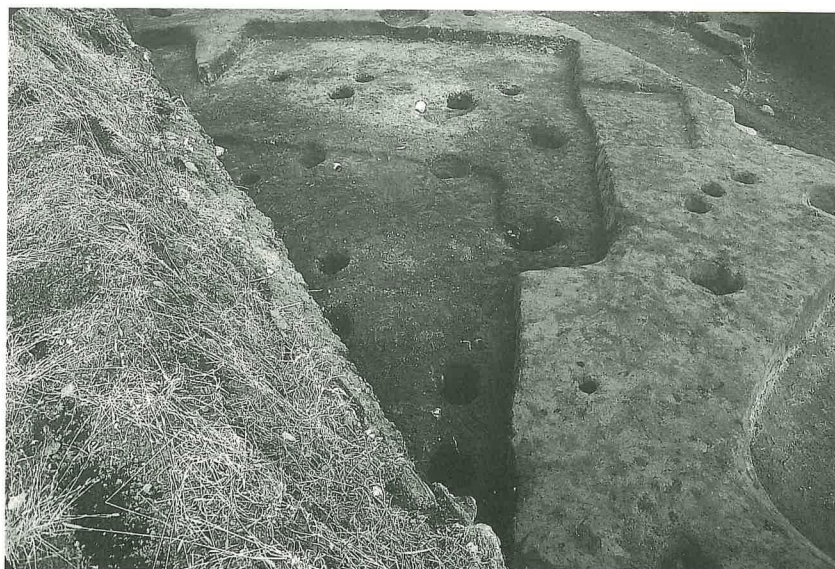
7号竖穴住居跡



8号竖穴住居跡



9号~11号竖穴住居跡・3号土坑

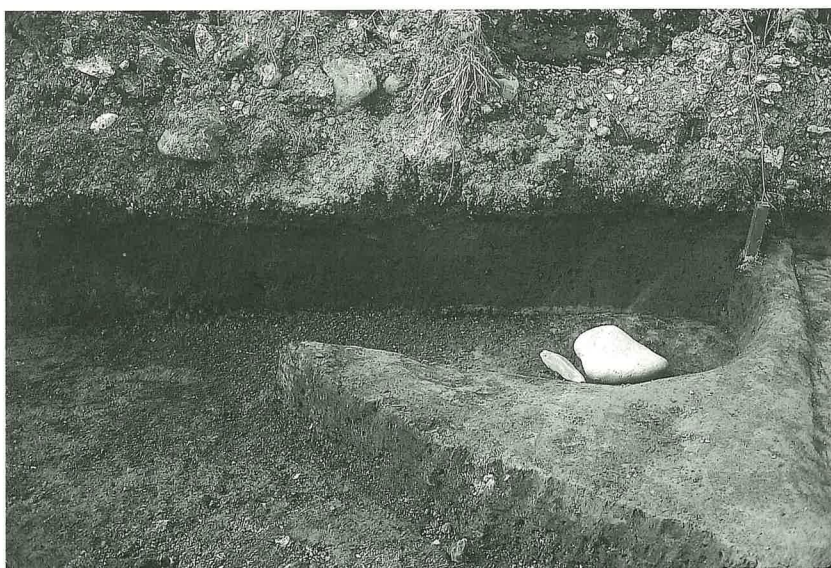




9号竖穴住居跡

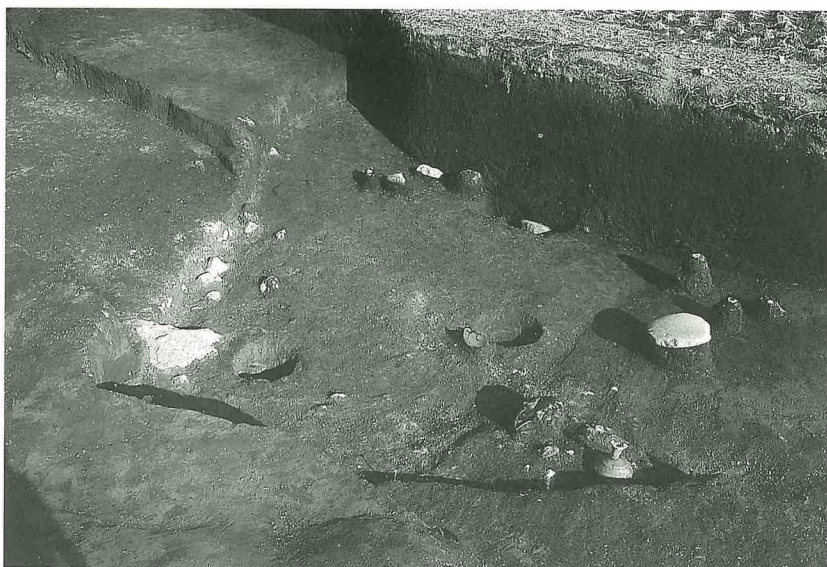


10号竖穴住居跡

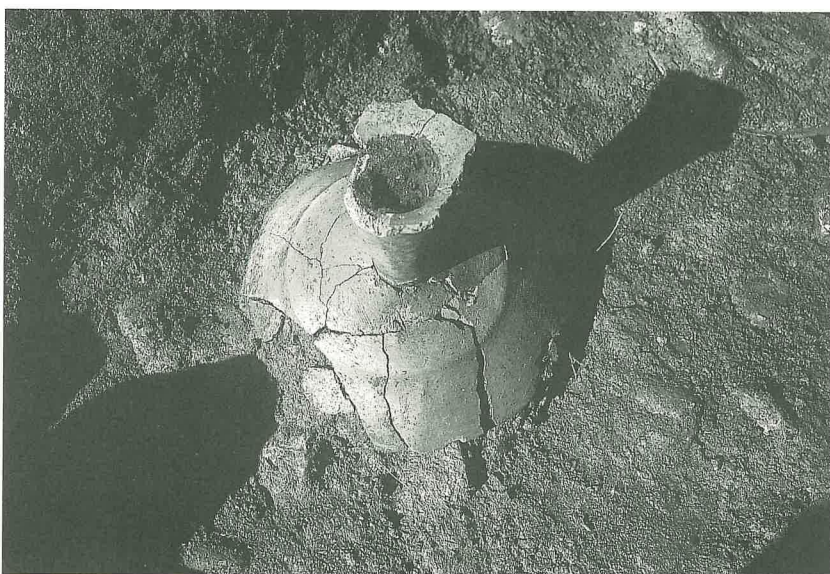


11号竖穴住居跡

12号竖穴住居跡

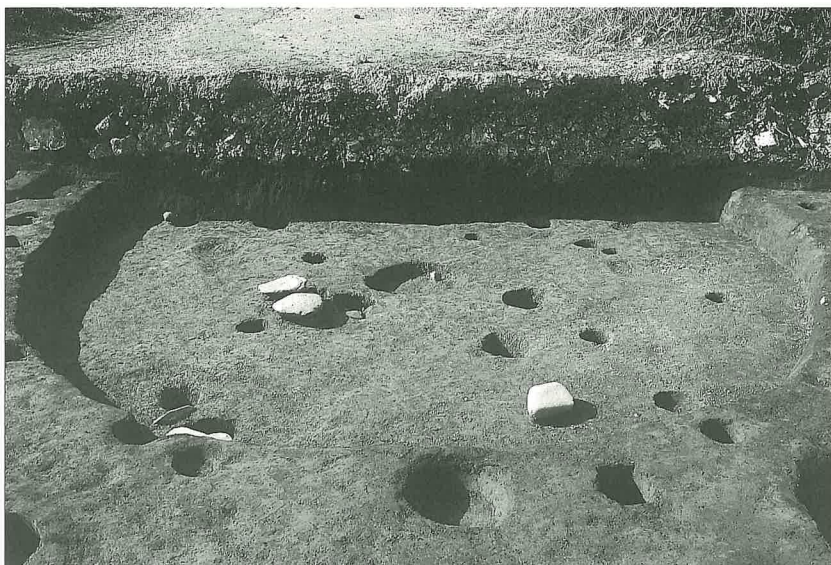


12号竖穴住居跡遺物出土状況



13号竖穴住居跡





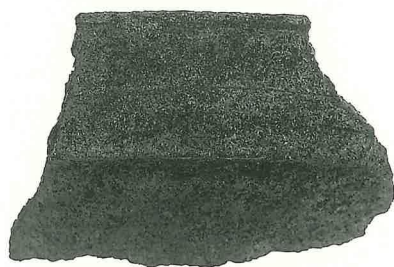
14号竖穴住居跡



1号土坑

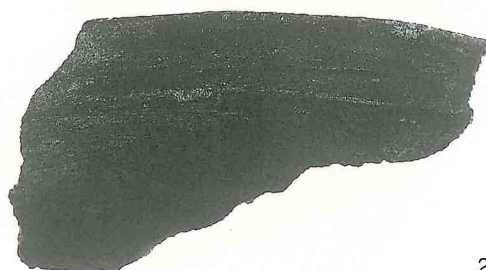


2号土坑



1

1号竖穴住居跡出土遺物



2

1号竖穴住居跡出土遺物



3

1号竖穴住居跡出土遺物



4

1号竖穴住居跡出土遺物



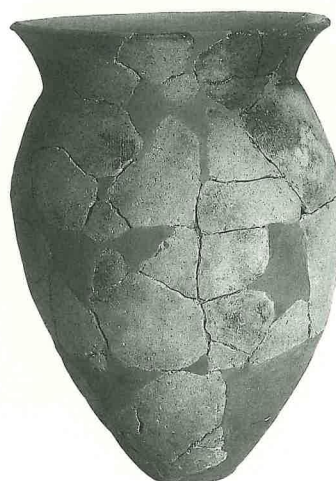
5

2号竖穴住居跡出土遺物



6

2号竖穴住居跡出土遺物



7

2号竖穴住居跡出土遺物



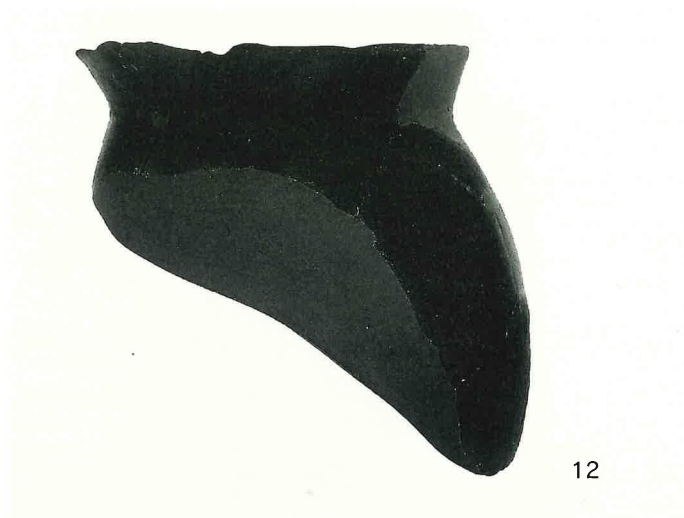
8

2号竖穴住居跡出土遺物



9

2号竖穴住居跡出土遺物



12

4号竖穴住居跡出土遺物



13

8号竖穴住居跡出土遺物



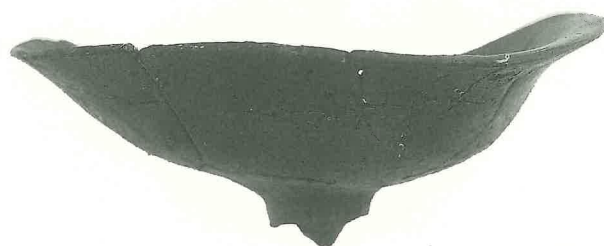
14

9号竖穴住居跡出土遺物



15

9号竖穴住居跡出土遺物



16

9号竖穴住居跡出土遺物



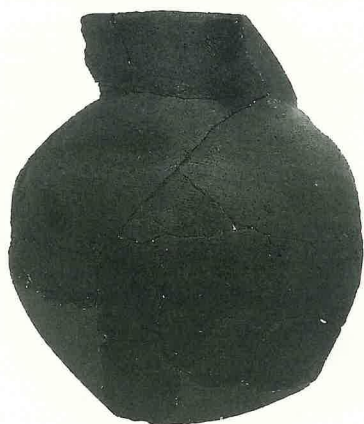
17

10号竖穴住居跡出土遺物



18

10号竖穴住居跡出土遺物



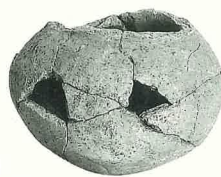
19

12号竖穴住居跡出土遺物



20

12号竖穴住居跡出土遺物



21

12号竖穴住居跡出土遺物



22

12号竖穴住居跡出土遺物



23

12号竖穴住居跡出土遺物



24

13号竖穴住居跡出土遺物



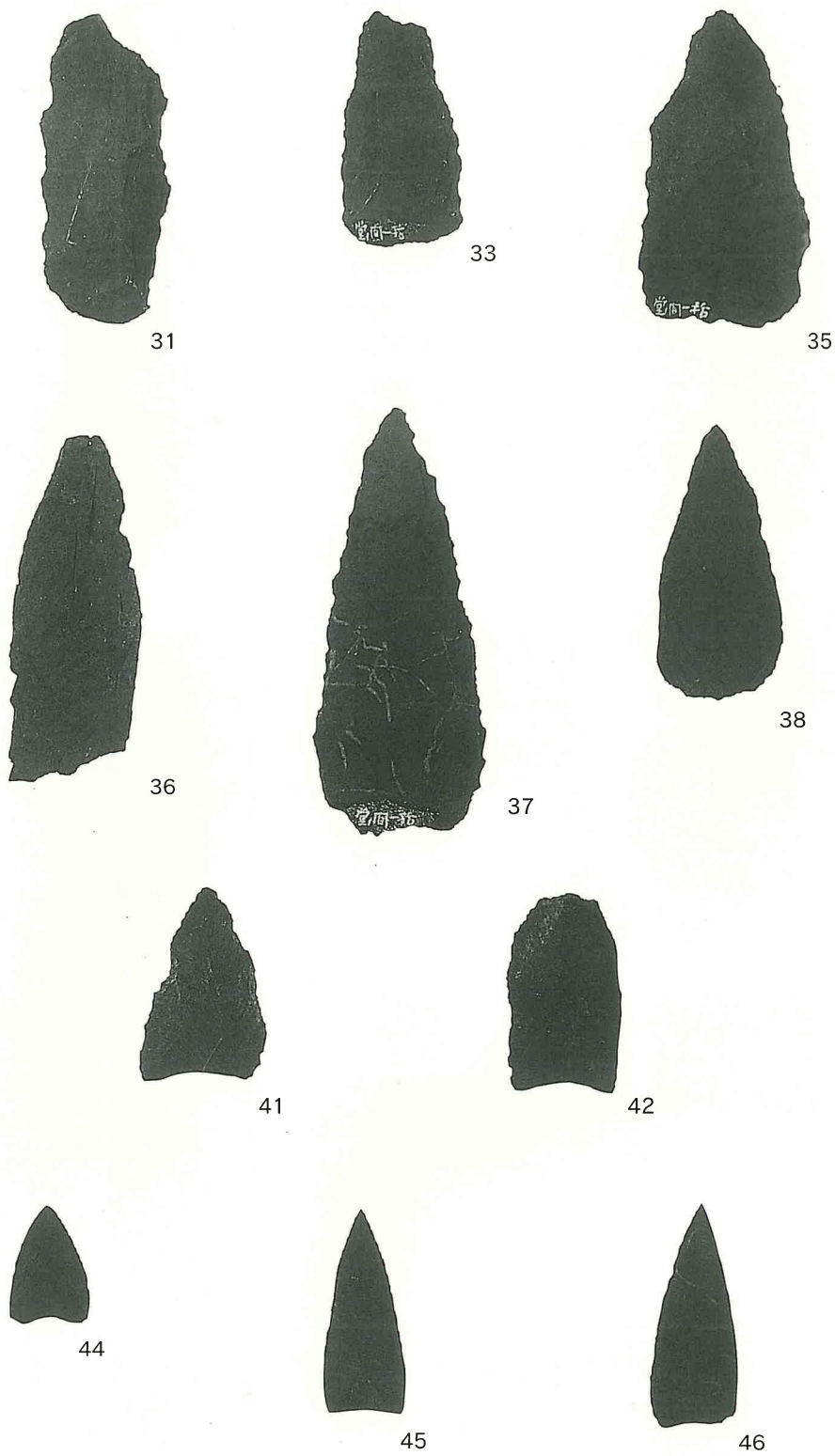
25

13号竖穴住居跡出土遺物

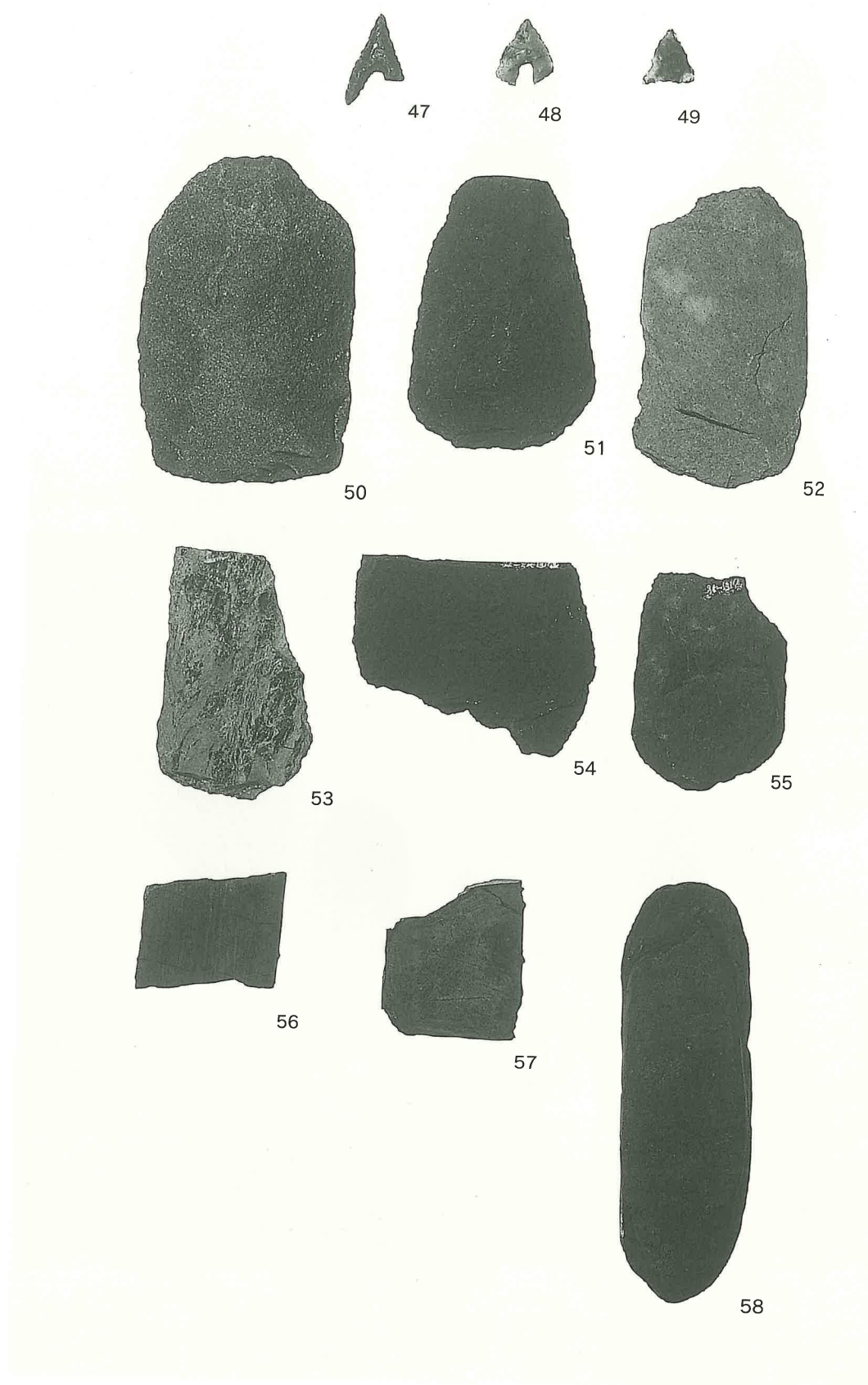


26

14号竖穴住居跡出土遺物



14号竖穴住居跡出土遺物



表面採集遺物

フリガナ	ドウノマイセキ
書名	堂ノ間遺跡
副書名	主要地方道三重弥生線（因尾工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第101輯
編著者	染矢和徳
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1998年11月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ドウノマイセキ 堂ノ間遺跡	オオタカ 大分県 ミナミアヘケン 南海部郡 ホシノヨムラ オオサカドウマ 大字堂ノ間	444031	005	32° 55' 40"	131° 42' 50"	19961111 19970210	1100㎡	主要地方 道三重弥 生線(因尾 工区)道路 改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂ノ間遺跡	集落	縄文・弥生・古墳	竪穴住居跡、土坑	土器・石器	

堂ノ間遺跡

主要地方道三重弥生線（因尾工区）道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第101輯

平成10年11月30日

編集 大分県教育庁文化課

発行 大分県教育委員会

〒870-0021

大分市府内町3丁目10番1号

TEL 097 (536) 1111

印刷 (有)久恒日昇堂印刷

